土佐日記略解

完

北岡廣

土佐日記略解の首に記す

天地の始めより我大御國は畏けれど、天皇命の天つ日嗣をとめ、萬の事かむりなきものから、人のことのもも、神代のまゝに傳り來ぬるを、あまたの世を經行につけて、いさゝのうつりのむりなきことあさむぎ、そのきゝやりにも、いひがさけれど、ならの朝より前つゝさを、ふるきとし、山城の京よりこなゐを、あさらしとすべし、されば今の世、歌よみ文かゝんにゝ、そのふるきをよそにし、見すてをべきにあらねど、今ゝそのあたらしきによるべきこと、更にもいむぎ、されは歌にゝ紀の貫之ぬしの、ものせられたる古今集あり、文にゝ同しぬしのかゝれたる、此土佐日記あどゝあたらしきことのもの、始ともいふべけれむ、今の世文かゝんにゝ、先此日記を本とすべし、さてこそ此ごろ皇典講究の課目にも、あげられたるならめ、然るに此註釋世に多けれど、校正をもむらとして、其ときでをを盡をぎ、あるゝくさぐさの說どもをあげて、うるさきまでにときひろめたるもありて、めあれぬ人ゝ、たやすくそのむねを見とむること能むぎ、かれこたび或人のこひによりて、此日記をときさとすことゝゝなれり、こゝたゞ先哲の說を、えらびあげたるが多かるに、其名をかゝげざるゝ、あめげなるに似たれど、紙數のまさるをいとひ、初心の人の見やすく、ゐよりよからんをを、むねとはれはなり、又諸本の異同もあなれど、それをもをもらざるゝ、よきにをたがへるををるべし、猶ときでとのためし事の跡のあかしなどゝ、諸註書にゆづりたれは、そをみてをるべくなむ

明治廿四年十一月

權大教正岡　吉胤誌

凡例

一 此日記はのぎらす歌はも文はも假字はのくべき事は更はもいとざれども簡單ゑむ爲として紙數のまさんことのゐんとしければ眞名字ゑ交へて今の世のおらとしはえたがへるなり

一 歌はも文はもはごり點ゑうつことゐあるまゝきことなれど初心の者はよみやすからしめんと本文はもはごりをうちさるなり

一 低頭ゐ一くさりの段落をゆけて其文の大意をゐゝげ或ゐ解釋の足らざるを補ひ或ゐ餘意をのべて初學の人は見やすくさとりやすからしめんとおり

土佐日記 略解

此日記ゐ紀貫之のぬし醍醐天皇延長八年土佐守は任せられて彼國に下られたりしが任はてゝ承平四年十二月舟出して京にかへり上られし旅の日記るり

岡吉胤記

そとこをもなる、日記といふものを、女もおて見んとてするるり

男もとある文意を考ふるに此時已に源氏物語まさ蜻蛉の日記紫式部日記などありて假字書の日記やうのものゐもとら女のゐざのごとくいひたやしゝんをあどて女にゐぎるべき男もそべきものどとことゐりおき次に女もとあるゐ其男に對へさる言にゐあれどこゐ紀氏自ら女にありてゐゝれつるものなればあるゝしゐるにゐあらて先に失とれさる女兒をゐるしみまさ海賊のおそれあることをゐくして女のゐることゐものをさなげゐるゐより自ら書るこけるさまに物せられさるゐれば女もとゐゝれさるゐるべし

倘按ふに一本にをとこのとあれどさてゐ男にゐぎるこえまたあまりうけばりてことばのえらべもおだやゐゐら絲ば一本にゐ從ひがした

ある人あがたの、四とせ五とせはて、

ある人とゐ前にそれのとしおど

いへるが如く自らをヨざとおぼめかしていへり（ほがたといふ國守官人の任ぜられたる官宅の地をいふ任限は多く四年なれども新任の國守交替よなるまでをかけて云ふいへるなり）れいのことゞも、みな去をへて（是もかぼ先のしたる言よて例のことゝは公事官物の受取渡しなどを爲し竟へたるを云ふいへヨ）解由（ゲユ）など、りて（解由とは算勘といこはりなしとの証文を後任の人より受取れたるなり）をむさちよりいで、舟にのるべきところ（トコロ）へわたる（すみなれたるやあたをいでゝ舟場にもうるゝなり）かれこれ去るを去らぬ（去りたる人も去らぬ人もあまた打おくりに參りたるなり）年ごろよくぐしつる人々なん（おくりする人々の中に任國以來親しく使ヨれたる人々をいふ）わかれがたく思ひて（そ輕き皆へ）其日去きりにとかく去つゝの、ぎるうちに、夜ふけぬ（ヨのれを惜みて名殘をしきことなどをとやかくといひさヨぎつるほどに夜ふけくなりたるなりのゝじるゝかしましくさわくをいへり）

縣（あがたとい）を（ほがたといふは班田（アカチダ）の義にて田を分つより出たる言なり昔しは六年に一度諸國御料の田地を改めらるゝを班田使といへるを思ひ合そべし）

廿二日和泉國までたひらかよと、ねがひたつゝ（和泉畿内よて都もちかく去うも土佐よりのさし入なれバまづそこまで海路平穩なれがしと神佛に願をたてられたるなり）藤原言實（トキザネ）舟路（ヂ）なれど、馬のはなむけす（言實は土佐國人なるべしさてヨのれの時馬のヨなをかなたにむけつゝがもなくてよなぞいひけんをもとにて餞には馬のヨなむけの料に酒なぞのませまたおくりものなどするをもいへりさて陸にあるもれゆ云にこゝい舟路なれぞゝいたはむれいへるなり）ありこなるあ去も、去ひきて、いとあやしく（上中下の人皆醉過て平生にかゝりたるをいふ）去はうみのはとりよて、あざれあへり（あざれはわまへされば而るに魚肉などの腐爛したるをあざれといへれば擅ゝある海邊にても人はあざれあへりとたはふれのけるなりそは魚肉は鹽をかくればくさらぬものなればなり）

此日記のかきざまなはざりに見すごせばさのみもあらぬをふかくあぢヨひみれは心も筆も及ばざるぞりのあぢヨひあるべしそは此日記はしめにをとこもそなる日記といふものを女もして見んとてなぞあるよりこをとをうらうへにいひて言のほやをなせるをもちてもはら興としてゝ、れたればたはふれたるも多かり舟路なぞ云々去はうみのやとりよて云々の類下にもわまたあるべし心を付てみるべし

廿三日山の康教といふ人あり、この人國ゝかまらぞしも、ゐてつかはるゝ、人にもあらざりき山は姓なりこれも土佐國の人なるべし此人は官衙などにゐてつゝはれたる人にもあらざれど定めて家がらの人なるへし これぞたゞ志きやうにて、はなむけ〳〵さる具實なる人とみえてはやく送りゝ參られたるなり守がらにやあらん こは紀氏自ら謙りの言なりそは國司の人がらのあしきゆゑにやあらんとなり國人の心のつねとして、今はと見ねざなるを今任限はて京ゝへる時にも薄情なる人の常として今はとてゐれにも來らざるとなり心ある人ゝはちてきなん、きける中にも心ある人はさる薄情なることを心にはぢてとひくる人もあらん此康教はたしてとひきたるとなりのによりてやむるに志もあらず こはおくりものゝよきよりてその人をさへはむるにはあらずまたく厚情をほむるとの意なり

こは康教の厚情を感するあまりに人情の輕薄なることを歎せられたるなり

廿四日講師うまのはなむけしに、いでませり此時分國々ゝ國分寺ありて其住職を講師といひて其國の僧尼の司なりそれがゐかれゝ來られたるなりありとあるゝみ志もわらはまで、ゐひ志れて ゐらとい小童をいひゐひ志れては醉過ておろかゝなれるさまをいふ志れい白痴の義ゝて愚人をしれ人ともいへり一文字をざに志らぬものゞ、あしは十文字にふみてゞあそぶ こい例のたとふれゝよりけるゝよ志ぞろなるをいふなり今いふ千鳥足などゝ同し

志ぞけなく醉しれたるさまをよくもかもしろくかきとられたるものなり

廿五日守のたちより、よびにふみもてきたれり新任の土佐守より使を以て紀氏をよびゝおこせたるなり よびたのしまれたるなり

夜ひと夜、とろくあそぶ呼レテ彼レ見レスル中ニ やうにて明にけり一晝夜のはゞ

廿六日なゝ守の館にてあるゞゝの、ぎりて（今日も猶）

昨日の如く新任の守の館よりてなりあるじいもてなすことをいふ饗應馳走してかしましくいひさゞめくなり

たに、ものかつげさり（自らよい元より（新任守の紀氏）従者どもまでもきぬなどかつげあとふるなり）からうたこゑあげていひけり（詩を聲よあげて吟ずるなり）やまと歌あるゞも、まらうども、こと人も、いひあへりけり（唐歌からうたよむ）

かへてやまと歌といへりあるじは新任の土佐守なりまろうどい紀氏自らをいへりあるじをさきよいへるは紀氏の自記なればなり（客人）

たゝこれにはかゝずやまとうたあるゞの守のよ免りける（詩い此假字ぶみよ似つかいしからねばとぶかれて歌のみあげられたるなり）

都いで、君よあはんとこしものをこしかひもなくわかれぬるあな（この歌は新任の守のよめるなり其意いしみてきつるよかくとるゞをこしかひもなくとくるかるいことのはいなさよとなり）となん有けれゞあへ

る前の守のよめるこは紀氏自らの事なれどもこの日記いすべて女よ託してかゝれつればゞざとかくよそ人のやうよかゝれたるなり

ゝろさへの浪路をとはくゆきかひてわれよゝべきはたれならなくにこい紀氏の歌なりゝろたへは涙の白きよかけたる言なり意はかゝる遠き海路をゆきかはりてからきめよあへる人は外よもならゞと思しを又ゐれよ似て君よもからき涙路をへておいしけりと云たしみいたゞりてよめりたれならなくよは外の誰人よゝわらなくよといへる義なり

こと人々のもありけれど、さゞしきもなかるべし（此時外の人々のもあまたあれどもこゝよあぐべきやどの歌もなかりしとなりさかしきゝ歌のすぐれたるをいふ）とかくいひて前の守も今のも、をろともにおりて（紀氏いとまをつげて館を出らるゝよある人も階よりおりておくれるなり）今のあるゞも前のも手とりあゝいゝて名ひごとよ心よげあることゝていでよけり（互に手をとりかはして名殘を惜み醉ながら門出のことばぎなどいひかはすをいふなるべし）行ケリ

新任土佐守もいとよくこゝろをつくしたるさまみえたり

廿七日大津より浦戸をさして、こぎいづ浦戸ハ大海と入海とをへだてゝさし出たる所なり

大津より南へ二里計りなり

あくあるうちに、京にてうまれたりし女子こゝに、おいにおて俄にうせにおりぬ京よりつれてくだられたりし女子を此國にて失はれたりしを今京にかへるとて思ひ出されるなり

このごろのいでゝさち、いそぎを見れど、なにごともいいわず人々ハ旅立の用意を取いそぎて京へかへるとて心うれしきさまなれど紀氏ハ女子の事思ひいでゝものをもえいとずかなしみ思ハれしなり

京にゝへるに女子のなきのこゝぞ、かなおみこふる京へかへるこゝとなれば誰もよろこばしく思へと紀氏いたゞく女子のなきをのみ悲しみて戀しく思はれしなり

ある人々もいたへぞこのあいだにある人のかきていだせるうた父母のみならず外の人までも悲しみに堪ざるなりある人とは紀氏のみづからいとれたるなり

みやこへと思ふものゝかなしきはかへらぬ人のあれゞなりけり

この歌は上にかなしみこふるとあるをうけてよめるなり今京へかへらんとてなべての人々はいさましげなるふかくもの、かなしきとかへらぬ人のある故ぞとなりまたあるときには

かなしみのあまりかくも思ひつゞけられたるなり

あるものとわをれつゝなやなき人をいづくとてふぞかなしかりける

此歌の意ハなき人をなくなりたりといふことをさへもなげきのあまりにうちわすれてともすればいづくにあるぞとゝひなどすることのありしなり有無をさへわするゝ計りなげきに志づまれたることいとくあはれなり

宇治拾遺に今ハ昔志貫之が土佐守になりてくだりてありけるほどに任はてゝの年七八ばかりの子のえもいとくあはれなりうせけるがとりくにづらひてうせにけれはなきまどひてやまひづくばかり思ひこがるゝほどに月ごろになりぬれバかくてあるべきことかはのぼりなんと思ふにちごのこゝにてなにとわりしはやなど思ひ出られていみじうかなしかりけれはとしらにかきつけゝる　みやこへと云々の歌あり

愛しまれ

て貫之の歌とせり此日記にハみづからのをも人のさまにかけるも多けれはいづれにてもありなん

といひけるあいだに、鹿兒の崎といふ所にいたるに土佐國の内なる事あきらかなれど名所に鹿兒の島かごの渡しなどあるいことなるゝ守のはらから、またおと人これ

あれ（新任の土佐守の兄弟其他の人々をいふはらからい全胞兄弟をいへり）酒などもておひきて磯に
おりゐて、わられがゝさきことといふ（あとをおふこと鹿兒の崎まで來たりて別れを告るなり）守
のたちの人々の中に、このくる人々ぞ、心あるやうにい
はれはのめく（いとれほのめくといふ其心ざしのまめなるを也）とをもはよいでゝ（去らせがはなるをいふ）かくわか
れがたくいひて、かの人々の、くちあこをろもちにて、この
うみべよりて、になひいだせるうた（くちあみは口網なり今世よりも海人等が引網より口網與網といふあり口網は廣六七尺にて長數十丈もあるを海中へ引ゑえて魚をとるよりそを引あぐる時より海人等こゝらなみたちてよりなるひいだすものなりさて人々の口網もいとおもくてたやすくよみ出しがたければ彼あみを引上る事の如く人々諸もちよりて互にたすけあふてやうゝよよみ出たりと例のたはふれて書れたり）

をゝと思ふ人やとまるとあしかものうちむれてこそ
われゝきよけれ（葦鴨はむらがりとぶものなれば打むれの枕詞とはなれるなり意い別れを惜と思ふ御方やといまりまさんかとかく打つれてこゝまでふりとえてとひまいらせしとなり）とありけれゞいといたくめで、、

ゆく人のよめりける（いとは最愛などをよめりいたくは痛切の意なり極大ともかけり漢文にも痛快痛飲などいへりめでゝは愛賞の義なりゆく人は紀氏自らをいふ）

さゝをゝせとそこひ志られぬわさづこのふかき心を君よ
見るかな（さをゝ棹なり小尾の意なりさづみゝ渡つ海の義にて海はたるものなればさだともいふ其海といふは全水の義なりさて此歌は君がふかき心を今こそみたれといとんとて上の句ゝ序よおけるなり）といふあいだに、ろぢとりもの、
あゝれも志らで（かぢとりは船頭なり船頭ゝ人情をも辨へずつれなくむくつけきさまをいへり）おのれ〳〵酒
をくらひつれゞ、はやくいなんとて（おのれしのしは助字なり志いなんは往去なんなり）
はみちぬ風もふきぬべしとさわげゝ舟よのりなんとす
（さゝぎのさゝいさゝ〳〵なといふ音より出たる詞ならんさきゝ涌わがるのさきなりさてゝのかぢとりよゝいら立られて海邊より舟よ乘られたるなり新任の守のそちから其他おひきたりしさまかぢとりのむくつけきさまなどいとおもしろく書きとられたる中よりもくちあみもろもちのことばいとめづらし）

このをりよある人々、をりふしにつけて、から歌ども時に似つかはしきをいふ（人々い此折よかなへる詩ともを吟じ出たるなり）又ある人にしのくになれどかひうさなどうたふ（かひうたは甲斐歌なり甲斐い東國なればよしの國なれど、いいへるなり）かくうたふに、ふなやうたのちりもちり、そらゆく雲もたゞよひぬとぞいふなる（こは漢土の故事よりてうたへる聲のおもしろきをやめられたるなり）こよひ浦戸にとまる藤原の言實橘の季衡（トキサヲ タチバナ スエヒラ）よと人々おひきたり（言實い前よりとなむけしたる人なりしが又もこゝまでおひ來しなり）

こゝよりひうたとあるは古今大歌所より甲斐歌とありてかひかねをさやふせるさやの中山かいがねをねこし山よも見しかけゝれなくよこをりふせ心横ヲ伏ルヲこしふく風を人よもがもやことつけやらんとある二歌なり前のうたよけゝれなくとあるい心なくの邦言なり此歌いかく別をしきをりよりぢとりの心なくもいなんといそぎたるよりの後の歌いのおくりこし人々も都の人なれば京よ思ふ人もあらんを梶とりがいひさをぎし其風を人よもがなことづてやらんといふこゝろよりさへるなるべしさて又ふなやうさのちりもちりといい劉向別錄といへる書よ魯人虞公發聲清哀蓋動梁塵とあるよりそらゆく雲云々い列子陽問篇よ泰菁撫節悲歌聲振林木響遏行雲とあるよりたるならん

廿八日うら戸よりこぎ出て大みなとをおふ（おふい風よ舟をおふいするなり追風よ行をいふ）このあひだよ、はやくの守の子、山口の千峯（ミネ）酒よきものども、をてきて舟よいれさり、ゆくくのみくふ（貫之より前の守の子とあるい國の去べき女のはらなどようまれてとゝまりゐたる人なるべし、よきものいよきさかなをいへり）

廿九日大湊よとまれり、くをしゝふりいねて（くすしい醫師なり、ふりえとい振延の義）似たり（屠蘇白散い正月元日よ用ゆる藥種なる事今もありけふい承平四年十二月小の月なれば）屠蘇、白散酒くはへてもてきさり、心ざしあるに

（延喜典藥式云白散一劑（歲且以温酒服五分一家有藥則一里無病帶此散病氣皆消）屠蘇一劑（治惡氣温疫辟邪風毒氣）とありて昔しい元日よ此二品を酒よ和して飲たり今い屠蘇のみを用ゆ）

元日おはおなしとまりなり、白散をあるもの、夜のまとて

舟やうたにさしはさめりけれど、風にふきながされて海にいれて、ねのまずなりぬ。のの白散を元日よのまんとてある人の去ざよ舟の苦よさしてさみ置たりしを夜のまの風よ吹きちらされて芋も海帶もはがためもなし。こい皆元日よ用ゆるものなりてがためい歯固なり人い歯をもてよてひとそるがゆゑよ歯をよてひとよむなりてがためいよてひをかためる意なるべし古へい歯がためのいてひとて禁中よ行れつるなりそい延喜式西宮記河海秒よ見えたり此日御歯固料よ大根瓜串押鮎燒鳥などを供進せしことあり

あうやうの物なきくになり、もとめもおかぞ用意もして求めもおうずとなりたしあものくちをのみぞをふ。押鮎い重き石などよて押漬たる今も献せし例もありて此國の産物なれば必ず求め貯へられたることなるしさて此押鮎を人々のゑべるさまの口をそふよ似ていと可笑くみえたるなり

このをふ人々のくちを、たしあゆ、も去思ふやうあらんや。押あゆのもし心ありて思ふことあらばとたいふれて書れたるなり

けふは京にのみぞ思ひやらるゝ。元日なれば京よありなばさかぐもせんるいさるこるなり

九重のかどの去りくめの繩のなよしのかさら、ひ、ら木らいかにとぞいひあへるい。九重のうどの内裏の宮門を云ふ去りくめないい日本紀よ端出之繩とあり去め繩のことなりなよしのうしらをひいら木よさして門よさせい邪鬼の難を遁るゝといひつたへたり今い節分よ鰯のうしらをさすなり

こい承平五年の正月元日なりたいふれ書れゑるよ其時代のことゞも思ひやられていとをかし

二日なり大みなとにとゞまれり、講師ものさけれこせたりもの、さけいさまくのものとさけなりおこせい贈り來すの義なり

三日おなじところなり、も去あぜ波の去ゞ去とを去む心やあらんこゝろもとな去のうちついき日よりのよのらぬいもし風や波れををしみといむるゑやと思ひとびていへるなりこゝろもとなしい安心ならぬをいふ

昔し佐理卿任ていのぼられ々るよ伊豫國のとまりよて日いみドうあれうみのをもておそろしきも少しなほりて出てんとし給へば同しやうよのみなりぬある夜の夢よ々たゝき男神あらされて日よりなしくて日比へ給ふい我心なりそい他の社よい額のかゝりたるよおのがもとよなきがなし

々れば かけんと思ふよなみ〳〵の手してうゝせんいいとゐろく侍れいう
ゝせ奉らんと思ふよりとゞめ奉りたるなり云々なるを思ひなとすべし

四日風ふけゞゐいでたゝぜ、昌連酒よきものたいまつれ
り昌連も土佐國人なるべし奉るを音便よたいまつるといへり　こうやうの物もてくる人よまは
も、ゐあらでいさゝけわざせさを物もなしなはしも云々たゝよしもえあらでの心なり万葉よ默然をなはとも云々よともよめりいさゝけい輕、小薄、などをよめり此人々よたゝよとあらでいさゝうおるもてなしをもせんと思ふ船中なれゞさるものも用意せざるとなり　よぎゝ、しきやうなれど、まくるこゝちをいすれども
うの物もてきたる人々よは対くれをとりでまくるてゝちのせらるゝとなり

五日ゐぜなみやまねば猶おなゞところにあり人々さゐ
ずとふらひにくむとふらひゝとひを延たる詞なり今ゝ吊問ゐいへり
六日きのふのごとし今日もきのふのごとく風波やまねば同じところよありとなり
七日になりぬれなしみなとにありけふゐあそうまを思

へどかひなし、さゞ波の白きぞみゆる此日青馬をみれゐ年中の邪氣よ逢ゐざるとて主上よも御覽ありしなり左右馬寮より引出す馬みれゞ白馬なりとぞ按ずるよ皇國ゐ古より潔白質素をむねとして白を用らるゝ事なれゞ白馬を尊みて馬寮よもめされたるなるべし然るよ漢さまの禮行いるゝよいたりて春を東郊よ迎へて青馬を用ゆることあるよりてあをうまといとなへきつるなりかゝる
あいだに人の家のいけと名ゐる所より、鯉はなくて鮒よ
りはゞめて、川のも海のもことものも長びつにになひつ
ゝけておこせりいけい地名なるべしいけといふ所の人の家よりと心得べしさてこゝの意いふ名ある所なれども池よある鯉いなくて川の魚海の魚などおこせたりと例のたゝふれかけるなりわろな、こにいれてきじなど花
につけたり、わかなぞけふをきらせたる、歌有そのうた若菜を籠よ入て雉子を花よ結付たるなりこゝうなゐ七日よ用ゆるものなれいことさらよゐくゐいへり
あさぢふの野べよゝあれは水もなきいけにつみつる
若菜なりけりあさぢふい淺茅生ゼアレ長クナテアラザルハギユヘ（ヒメキビ）田をゐとふまめふといふよて去るべし淺ぢふい野といと

ん枕詞なり名こそ池といへ實ハ野邊よしあれば水もなき池よてつみしるのなゝりといひて自然よ淺き心といへる卑下の意なり いとを

かゝかゝ籠のるのな枝きしよ歌などそへゐる其みやひたるさまを愛のしと賞たるなり このいけといふは、

所の名なり、よき人の男につきてくだりて住けるなり 是ハ上の云々を注せるなり この長櫃（ナガヒツ）の物は皆人わらはまでに、くれされは この長櫃の魚類異なるものゝ類を殘りなくみな人々よわたへしなり あきみちて、ふなこどもは、ばらつゞ

みをうちて、うみをさへおどろかして、あみたてつべし（こゝあく）

まて物なと打くひてとちつゞみなどうちてたのしみいふるゝなりさて海をさへ驚かして云々ハ例の筆よまゐせてすさましきまでいへりこのあ

いざよ、ことはあり（この外ハ事多かりつれとむぶかれたるなり）

池のなよがしが贈りものゝいさとよしてみやひなるそへたる歌のをかしきよハ貫之ぬしもいたうめでよろこばれたるなり

いまわりごもたせてきたる人、その名などぞや、いま思ひ

いでん（日頃よたがひてけふハ何くれと事多かりかゝる日よも破籠持參せし人ありさる事のまぎれよ其人の名もすれたりといふ次よ誹謗せん

ゑめの筆づきなり其人の名何とぞやいひしをそれたり今思ひ出すべしとなり）

ありてなりけり、とかくいひくて浪のたつなること、

うれへいひてよめるうた（この人ハるヒのすきなる事をしれゝば歌よみかけんとてきたり其思ひつきたる歌の心

ちらひをこしらへつくらふためよ「船出もなりがたきまでなるゝ事など」かくいひてさてくけしるらずも波のゑつことよと愁ひ顔よて歌のはしをいひおこせるなり）

ゆくさきよたつちらなみ乃聲よりもたくれてなかむ

われやまさらん、とよめるゝ、いとおはごゑなるべし（ゆくさきよたつちら波といへるゝ船路よゝ禁忌なりとぞ云かのみならずおくれてなかん云々といへるもあまり云たる事なれば大聲なるべしとたゝふれたり）

てくるものよりは、うたいいゝゞあらん、このうたをこれ

かれあはれゞれども、ひとりもかへ云せぞ（もてきたるヒりごのものよりゝ歌ゝいかゞあらんこれかれゝ面白きやうよほめそやしてあへしちひいすれどもひとりもかへしするものなしといふ）云つべき人もま

おれ、ど、おれそのみいたがり、そのそのみくひてよふけぬ（かへしすべき人もまじりをれども「みなこの破子のみを」めでいたがり其物ばかりくひつゝ夜をふかせしなり）このうたぬ歌ぬしい手をちなくてまたまからんずといひて其座を退きしなりまからんずといまかりいでなんといふことを田舎の方言よ志かいひつるなりゆく事をゆかずくふ事をくいずなどもいへり）又まからずといひてたちぬ

わらはなる、ひそろまいふ、まろこの歌のかへしせんといふこれい紀氏の子なるべしそをおぼめかしてかいれたるなりまろいかしきをかどありといふよひかへてかどなくまろなりといふ意みてつたなしくふかなるよしの自稱なり）ある人の子のおどろきて、いとをかしき事かな、よみてんやはよみつべくははやいへがしといふに幼兒のかへしせんといふよ驚きてめづらしき事をいふものゝなまことよみてんや覺束なしそれともをしよまばとやくよむべしとなりまからぎと云て立ぬる人をまちてよまんとて、もとめけるを夜ふけぬとよや、ゞがていにけりの歌ぬしのまろちんずとて立ぬるをまちてよみたるうたもぬとんとてさづぬれど座付面白うらねい其まゝそぐよろへり

しなるべし）そもくいあゞよみたると、いぶかしがりてとふ、このわらはさきがにはぢていはさ、志ひてとへばいへるうさそもくいそれもくものの略よて上をうけていひふこすこと宣かり故に最初よいふべきことばよあらざるるりいぶかしい氣吹うしよて不審をいふさすがよい志うすがよともわりて務めて本を忘れさるるの意あり）

もく人もとまるも袖のなみぎ川みぎはのみこそぬれまさりけれ（涙川い伊勢よも陸奥よも名所あれどもこいたゞ涙をつよくいとんとて川よるしていへるのみあるべし扨て此意いわれ行く人もとゞまる人も同し涙の袖よみちて川なせるがさゞ汀のみぬれまさりて眞こいろよりわき出る涙よとあらちで眼のミぬれるるあらんとあとめそしりたるるり）となんよめる、かくはいふものか、うつくしけれゞにやあらん、いと思はぢなり（子を愛するよくもよミたるとおぞろきさて い我愛する心にやあらんいとよくよみたりかくよまんといい思いざりきとふりかくいときつるものいと思いずありの語ものだらぬこいちす脫字あらんか）わらはことにてはなにかせん、おんなたきなにを志つべし（こをわらいべのたは貳言れ言といとんい詮な

き事あれば媼翁かの返歌よしてつかはすべきとなり あしくもあれ、いかにもあれ、たより
あらばやらんとてたかれぬめり かくも思ふいおのが引かたゑて實いよからぬ歌よやさいよしあしく
もあれかの人の心よからぬよもせよかくもよめりしものをすておくもいかゞなればたよりあらばついでよやるべしといひかけておかれしなり

此段いの破籠もちてきたりし人の心がまへもなづかしのらぬよよみ出たるうたも人々の心よあかぬより何くれといたがりいへるよえたへずして立さりたるゐらいの其歌のうへしいて爲いふれたる其父のうつくしみてほめすぎたるなどよく人情をつくし爲るなれど意外の意味ある處なれ

心よくせずばまがひぬべし

八日さはる事ありて、猶たゞ所なり 今日い日よりいよろしけれどさりがたき事ありてきのふに同じく大みなとにありとなり こよひの月は海にぞいる、これをみて業平の君の、山のはにげていれずもあらなん、といふ歌なんれぼゆる 大湊は遠く南よさし出たる所あるいか山のとゝよげていれずもあらなんとよまれたるを思ひ出られたるなり 海邊にてよまゝ、ゑかゞ、波立さへて、いれぞもあらなんとよみてましやらいう波立塞ていれすもあらるんとよまれなんことよとなり いまこの歌をれもひ出てある人のよめりける

てる月のながるゝ、見れば天の川いづるみなとはうみにざりける、とや 月のゆくへを見れば波より出て波よこそいれさらば天上の天河も流れいづる湊いやむり此世界の海むらみさりけるといへりとやいとかやといふ意よてある人とおぼめきたるをうけたるなり

七夕の故事い博物志よ見へたれども つかもなきあとなしごとなるを皇國よも傳へて乞巧奠とて普く牽牛織女を祭りたる事もありしもいまいやめられたれいいふも詮なきことなり

九日つとめて、大湊より那波のとまりをれはんとてこぎ出けり つとめていい早朝をいへり夙よ目をさますより出たる語なりとぞ これかれたがひに、國のさかひのうちはとて、見れくりにくる人あまたゞなかに、藤

原言實橘季衡長谷部行政らなん御館よりいでたまひし日より、こゝかゝこにたいくるこれかれかゝるくよくるなり國のさかひを出ぬうちゝ猶こなたよあるゝなれゝ尋ねずていゝ有るべからずとて見送る人たへずといふ言實ゝ三たび季衡ゝ二たび長谷部行政ゝこゝよ初めてみゐたり御館ゝたゞやけの館なれゝ御の字をつけたり紀氏自らをよその人のやうよいゝれたるゝ女の手よて書たるよしなればなり

この人々のふかき心ざゝは、この海にもたとらざるへゝ

この人々ゝ常よ召しつかゝれし國人よてことよ親み深かりしなるべし其とまりゝ猶土佐國をとなれざるも舟ゝ風よもまかするものなるよかくとまりゞよたづねとゝるゝ人々のこゝろざし實よ淺からぬわざゞかし

これより今はこぎはなれてゆく、これを見たくらんとてぞ、この人ともはれひきける此漕きとなれゆく今ゝの限を見おくらんとてこの三人ゝ此所まて追付來たるとなりゝくてこぎゆくまに〳〵海のやとりにとゞまる人も、とはくなりぬ舟の人もみなぞおりぬ岸にもいふ事あるべゝ舟にも思ふ事あれどゝひなし、かゝれどあの歌をひとりごとよゝてやみぬこゝゝみえすなりぬべしとあるべきを次よ岸ゝもいふ事あるべしとあるよゆづりて此べしいとぶゝられさるかゝらんさてゝくゝかれとやざゝりさる上ゝさゝ思ひやるのみよてゝばゝり悲しき思ひもさきよゝえゝ去らねゞひとりごとよ此歌をよみさりとゝる

思ひやる心はうみをわたれどもふみしなければ去らぞやあるらんふみだよゝよゝいゝのはゝだてしゝの心も去らるゝものゝれど今ゝふみをやるべきたよりもるけれはゝかゝまで思ひ悲みをるゝとも彼の人々ゝ去らざらんとゝる

今の世ゝことゝるゝて海路のゆきゝもたやすゝらねゝかゝる遠き國の人々よゝ一たびゝられて二さびあふこともかたくて生ながらのゝゝられなればゝゝよかなしかりけん

かくて宇多の松原をゆきもぐ、其松のかずいくそゞくいく千年へたりと去らぞ其松のかず幾ばくあらんを去らずまさ其松のげのものふりていく千年ゝへたらん去られずとなもとごとに浪打よせ、枝ごとに鶴とびかふ、おも去ろし

とみるにたへぎして、舟人のよめるうた（玉の神さびたる松の根ごとゝ波のさやゝゝ打よせたる其松の上よむれいる鶴の飛ふひてなく聲もさこそと思ひやられて憂世の外のこゝちせられていとをゝしされば舟人もむなしく見すごさんことのやいなくて歌をもつらねたるなり）

見わたせば松のうれごとゝすむつるゝ千世のぞちとぞ思ふべらなる、とやこの歌は、所を見るゝにまさらぎ（打聞たしたる松のうれにすむつるゝやがて其松を千年の後とちぎりふるさまなりといふうきゝ未ゝて梢といふゝ同じどちゝ共をよみて同士とも書々り同ドやとの物のむかへる稱ゝて親むりたゝいへりべらゝ可の語ながらべくと云ふゝ少しのゝりて其樣子を含める義なり俗にさうなやうな彩どいふゝ近しとなり前ゝ舟人とわりしゝ例の紀氏自らいゝれたり此處の絶景をゝまれつれぞ中々ゝいひつくゝべうもあらねばみづから歌を貶されたることなりん）

この字多松原も猶土佐の國内なるべし此地の絶景ゝづかの文ゝてゝくも書とられたるなり今もあらば行てみまほしきこゝちす

かくあるゝを見つゝ、こぎゆくまにく、山も海もみなくれ、夜ふけて西東もみわきして（天氣）てげの事ゝぢとりの心にまかせつ（さるゝふもしろのけしきもみわきゝおりて山も海も暮ゝより夕日も入ゝて、東西ゝのらぬ深夜の海上ゝさぐてげのことかぢとりの心ゝ頼みきりゝる舟中の心ぼそさまゝよひゝどめて地方とこぎゝるかれゝされば方もゝぬ人ゝいかゝゝあらんてげゝ天氣とゝめり）そのこもならはぬは、いとゝもこゝろぼそし、ま志て女はふなそこに、か志らをつきあて、ねをのみぞなく（男の中ゝもなれぬ舟路の人ゝいと心ぼそゝるゝまして女ゝいかゝ計なるらんたゝかうべを船底ゝつきあてゝ泣ゝたりとなん）かく思へど、舟子ゝぢとりは、ふなうたうゝひて、なにともれもへらぎ、そのうたふうゝ（かくゝる思ふゝゝれを常とする舟子揖取ゝ何ともおもゝずあるゝ夜風ゝうそふきゝたふもゝいとあゝれゝたのもしきこゝちせられんかし）

春の野にてぞねをびなく、わびをゝきにて手をきるゝゝつんざるなを、親やまほるらん、志うとめやくふらん、かへらや、夜部のうなゐもがな、せにこはん、そらごとを志てたぎのりわざをして、錢をゝてこず、たのれだにこぎ

これ田舎の俚言のまゝならんがうへよいたくとぶきていひつらねたるものなればしるといいかで聞とらるべきたゝ推あてゝ意をいとんよい春の野よりて引がすいきは手をきるをもいとゝず音よなきつゝつみたる菜を親も姑も貪りくふらんあへらやゝ其ふしの拍子なるべしそゝとまれよべのうなゐ來たれがしかのあたひの錢乞とらん今やりてと僞りてそしらぬかほにけふもゝてこけ其錢なくば來てもことゝらんをゝのれだにこずとなり ふきのりわざといかけどりのこりとなり これなみにおゝかれどかゝぞ これにひとしきうたぞも多かれどさのみいかきしるさずとなりこれらを人のわらふをきゝて、海はあるれど、心はそこしなぎぬゝのの楫取のうたへるうたぞもをきゝて限なき心ばそさもいさくゆきくらして、とまりにいたりて、わきな人ひとりたうめひとり、ある中にこゝちあしくして、ものも、ゝのし給はでひそまりぬけふゝ日ごろにたがひて漕つゝ行くらしてとまりにいたりぬさるに老翁一人老女一人ゐきてこゝちあしく物をもたべずして其まゝかひゝそまりて打伏たるなり ふきな人い息長人の義にて老人の稱紀氏自らなるべしたうめい姥をのべだる言にて老女の稱後にも出たる淡路の嶋のふはゝ子といへり

此日はゐかれの悲みもありしかゞ宇多の松原に心をやり舟人のうたに興を催したるも終日漕行しによりて舟酔に苦しまれたるなり

十日けふはこの那波のとまりに、とまりぬきのふ九日に那波のとまりをおはんとてとありて末にはたゞとまりとのみありつればこゝに地名を出されたり思ふにきのふはいたくなやまれたるまゝにこの那波の近き所にて舟を止られけふとやく此泊につきていこれたるならん

十一日あらづきに舟を出して、むろつをわたふ、人みなまだねたれゞ、海のありさまみゐず、たゞ月をみてぞ、にしひんぐしをゞ、おりける室津は土佐國安藝郡にありさて那波より夜をこめて舟を出されたるなれば船中の人みないねて苦おぞもあけゐたさねは海のありさまもみゐずたゞ落月のひまなどよりさしいるをみてゐづかに西ひんがしをしるとなり かゝるあひだに、みな夜あけて、手あらひれいの事ども志て、ひるになりぬ夜あくれは先手あらひ口そゝぎ髪をけづりなど例の事といふべしひるゝなりぬとは猶短日のさまなり いまし、はねといふ所にきぬ、わかきわらはこの所の名をきゝて、はねをいふ

所は鳥のはねのやうにやあるといふ、まだをさなきわらはのことなれば、人々わらふ、ときに有ける女わらはなん、この歌をよめる（言葉音ノ縮メテ言ハ中ニタルナリ）今しのし助字なり伊勢よりて今もいへりさて稚きをきゝてとねといふ所ハ鳥の羽根の形のらい此所の名をきゝてとねといふ人々笑しなり時よ同しよやうよやあるとゝひたるよありあふくそこよありける女をらい此子の言よつきてこの歌よめり

まことにて名にきく所はねならばとぶがごとくに都へもがな今とねと名よきく又このをらいのいへるがまことよて此所實よ鳥の羽ならいそれを得て空とぶ如く此船はやく都へいたれがしといへるなり此かなハ願ふ意あり稚き女のをらいの思ひつきいとをかし

男も女も、いかでとく都へもがなと、思ふ心あれば、よの歌よしとにはあらねど、げにと思ひて人々わすれぎ男女差別なく皆感ド入て結句あぞ打ずしつゝえをそれずとなりこのはねといふ所、やとふわらはのつひでにぞ、またむかしの人をもひいで、いづれの時にかわすれる、此所を鳥の羽のやうなる所うとひけるをらいのいとけなきがをかしうしみドきよつけてもむかしの子の同しやぞよ愛敬づきたるを思ひいてゝ去たとるゝ事かな何よつけてもかく思ひ出らるゝことの心苦しさよこいいかなる時よかをするべきやとなり

けふはまして、は、のかましがらるゝことい、くだりし時の人の數たらねば、ふるきうたよあずいたらでぞろへるべらなるといふことをおもひいで、人のよめるさるだよあるをけふハましして母親のかなしみなげかるることありそゝ一とせ下りし時の人數のうちこたび一人足らざれいふるき歌よ北へゆく雁ぞ鳴なるつれてこし數いたらでぞ歸べらなるとこゝ田舍へ下りて男よれくれて女ひとり京へ歸る道よてよみたりとぞ此事を思ひ出られて其悲みを母よ話しで自らよまれしなるべし

世の中よ思ひあれぞもこそふるおもひよまさる思ひなきかなといひつゝなん（憂世の中よいきまぐの歎きも思ひもわりといへども子を失ひし親の思ひよ似るべき思ひおしとなり去ぐいひつゝなきかなしむといへり）

右のうた自然よ出ていとうなしうなん後撰集雜よ兼輔のよまれたる人のおやの心いやみよならねども子を思ふ道よまよひぬるかなとあるよなら

べみる
べし

十二日あめふらず文時維茂が舟のおくれたりし、ならし津より、むろつにつきぬ雨のふるべき空の氣しきあり、しがふらざりし文時維茂ハ下司なるべし但し文時ハ貫之の子息時文と上下よりいれしなるべし紀氏も此船と待合せられしなるべし

十三日あづきにいさゝか雨ふる、ぢゞしありてやみぬ昨朝よりの曇天なりしが今日乃曉がさ男女これかれゆあみせんとよ少し降出しそれもまさやゝぬとあり

て、あさりのよろしき所にわりてゆく、海をみやれば、あさりハほとりと同じよろしき所い舟よりおりさいんよりよき所といふなるべし明日い齋日あれば男も女も湯あゝせんとて船よりおり立ゆくよこなさの海上とかへりみてよゝさる歌あり

雲もみな波とぞみゆるあまをぶねいづれかうみと、ひてぢるべく、となん歌よめる雲もゝなる白波の色とぞ見ゆるこゝよ海人あらばいづれの方が海原なるらん

といひてぢらんぢと夕ぐれのおぼつかなきけしきといへり

さてとをかのまりなれば、月おもしろし已よゝちなんとする月の海上よりあらはれておぼろざちさる夕つかさ實よとろしろるべくなん

ふねにのりそめし日より、舟にはくれなゐこくよきゝぬきぢ、それは海の神にわぢてといひて舟よりおりて女ぢちい衣のうるゝしからぬがらもづのしきよりすべて舟の中よていてきくれなるものとゝどめよきゝさのきぬいきぢ其故い海神といふものゝものめでするものなれば其見いれよわゝん事のおそろしさよなといひへり

なにのあしかげにことつけて、はやのつまのいぢし、ぢしあはびとぞ、心にもあらぬ、はぢにもあけてみせける

おなの蘆陰よむいづことさいぢぢそこらあさりのあしかげおりこそこらのあしかげよとおぼめかしていへるも次なるいみじきされごとをはのめきいでんとの料なりはやい延喜式よしをいふこれよりてはやのつまといのかすしあいばむ鮑なりばやい男の陰囊に似たり貽貝鮑い女の陰門に似たりされば男も女も舟中の苦みを忘れてうれる處にことよせてぢぎもあらぢにのきあけて心にもあらで陰所をもりくさず人にみられしとなり

編者しるしたる所ニテ所ニテ妻ノ美ナリ

愛ラレキ者

按ふはやい和名抄ニ老海鼠とわりて海鼠の一種にて陰嚢に似たるもの
なり我肥前國なる唐津より壹岐國あたりに多く生ずるものにてすしにい
最上の品あり貽貝い古書に文蠣似二女陰一とありて東海婦人とも云り九州ニ
ていふたり貝といふ女陰ニ似たれどなりあこびも女陰ニ似たれば女陰に
大小ふたとへてたい
ぬれかけるものあり

十四日あゑづきより雨ふれば、おなゞ所ニとまれり ふとつ日より

もよふしてきのふいさゝか降し雨て舟君せちみを、さうゞ物なけ
のあかづきぞまことにふり出たり
れば 舟君い船中の主君といへる心にて紀氏自らいへりせちみい節忌ニて六
齋日の一なり此日精進潔齋すれば一切の罪を消滅すべきよし佛書ニみ
えたりさらにものは精進物なり うまの時より後に、かぢとりのきのふつりた
りし鯛ニ、錢あければ、よねをとりかけておちられぬ かぢとりのつりし
鯛ニあたひの錢なければ米をつゝみして精進ふちせられしなり
か、ることとれはくありぬ、かぢと
り又鯛もてきたり、よねさけ志ば くくる、かぢとりけし
きあしからを かぢとりらは米をあたへられしうれしさにまたも鯛もて
きたれば米も酒もいく度もあたへられしにより てかぢと
りらの機嫌あしかりしなり

十五日けふあづきがゆにず、くちをしく 延喜式に今日供所の料に七種粥を煑ることあ
りまた今日小豆粥をたぶれい疫氣なしといへり然るに舟中なれば不自由にて
小豆粥をもよぬがくちをしくのく文字に意をふくめてとめたるなり
猶日のあしければゐざるはとにぞ 日よりのあしくして波風たち
たきをいふゐざるいふ居去にて膝行をいふ 雨ふりなどして舟のそゝみが
けふ廿日あまりへぬる、いたづらゝ日をれ
くれば、人々海をながめてぞある、そのわらゐのいへる 去年十二
月廿一日ゝかどでしてとや廿日あまり經たれども舟路いとづかゝして日數の
み重なれるを歎くなりかくいさづちに日をふれば さゝ海上をのみ打ながめて
くらしをるといふながめい思ありて打守るさまな
りしかつちく見をりてある童のよめりしといふ
たてゞたちゐれゞまたゐるふく風と波といれをふど
ちにやあるらん 風波の日をふれば共にたちゐのやまざれば思ふどちにいたとへたるなり いふりひなき
も、の、いへるにはいと、につかはし 右の歌い心も言もをさなけれどもとより ゐらいべのよめる

なればそれ相應なりとさすくるうたよいへりいふかひなきい數ならで言よもたらぬをいふ

十六日風なみやまねは、猶おなし所にとまれり、たゞ海のなみなくして、いつちかみさきといふ所、わさらんとのみなんおもふ海ハ風波なぐしていつしかみさきといふ所ハいたらんとまちぞわみおもへるなりいつしかいつれの時かといそぎ思ふ心にていつかといふよこととるり風波ともにやむべくもあらず、ある人の波たつをみてよめるうた中々よ心いそげど風も波もやむべきさまよもあらねゞ或人たへかねてうさをよめるなり

霜だにもおかぬあたぞといふなれどなみのなかにはゆきぞふりける南海い暖國にて霜だにおかずときゝたるに波の中にはさゆきがふりつゞけるとしろ白波を雪にみるしてよみたるなり

てふねにのりし日より、けふまでは廿日あまり五日になりにけり風波にさへられていたづらに日をおくるようみつうれたるさまなり

此ゆくさきのみさきも當國安藝郡の内なり其間五やすのうちぬ舟路なれば日よりを見さだめずしてい舟出しがたからん既よ十二日よりむなしくこ

こにとゞまりしなり

十七日くもれる雲なくなりて、あかづきづくよいとたもしろけれゞ、舟をいだしてこぎゆくこはひめづらしく晴ヨさりて曉月夜の面白きにうれかつ日頃待ヒびし船出おれば明るをまさで漕出しなり

このあひだに、雲のうへも、うみのそらも、おなじごとくになんありける、うべもむかしのそのこは、さをはうがつ波のうへの月を、ふねはたそふうみのうちのそらを昔のをのこは賈島をさす或書に高麗使過レ海有レ詩云水鳥浮還沒山雲斷復連時賈島詐爲二稍人一聯二下句一云棹穿波底月舟壓水中天高麗使嘉歎久レ之自レ此不二復言一詩云々とある此詩をとりてうさへるおりいさゝとはいか文字のうえれるいうたへる音調によりてあらさめたるものおり

ひけん、きゝさしにきけるなり此詩い聞さしよきけるなれば決めて差ふことあるべしといひきいさしはば聞去ふで俗に聞さづりといふよ同じくきかと正しく聞ざるなり此日記女のかける躰なればたゞ人の傳へを聞おぼへてたしのならぬよしにいひて今夜とりあへずうたひかへて聞だがへのあやまちに書なされたることのいみじうをかしきことをおもふべし

みなそこの月のうへよりこぐふねのさをにさはるはかつらなるらん（月桂といへること漢籍より種々ミえたり兼名苑といへる書より月中桂長二百五十丈月輪内有之此木秋花開云々などあり古今集あきの上には久かたの月のかつらもあきいるはもみぢすればやてりまさるらんさて歌の意い水にうつれる月の上より棹させば藻あるどのさいりたちんと月中の桂ならんといいへるなり）これを聞てある人のまゝよめるこれも紀氏自らいへるならん

かげみれば波のそこなるひさかたのそらこぎわたるわれぞわびしき（この歌の心あきらけしひさかたい枕詞にて久方の義なるべしもいきい性を訓り字書よは失志見とありて心ぐるしく難義なることをいへることとはあり）ろくいふあひざよ、夜やうやくあけゆくに、おぢとりら、くろきくも、にはかよいできぬ、風ふきぬべし、みふねかへしてんと（はてん音）といひてかへる（月いてりながらしらみ行く海上に一むら雪の俄よ出てきたる今風吹出べし船とくかへしてんといひもあへずはぎかへりしあり）此あひだ雨ふりぬ、いとわびし（月いあかゝりし夜のまのさまより引のへて俄よ雨もふり出しいろ計り難義の事なりけんさて室津よかへりつゝばあめもやみさるなるべし夜の月の面白かりしもいたづらごとゝなりて明がたの雲より引かへされしあなよくのさまを手よとる計りにかゝれたりおろそかになる見過しそ）

十八日あは同し所にあり、海あらければ舟いださぞ（雨はとれたれども風波あらければまたといまれるなり）このとまり、とはくみれども、ちかくみれども、いとおもしろし（日頃い室津より舟をとゝめたるなり然るに此所のけしきみても面白しとへり）いあ、れどもくるしければ、なよごともおぼえぞ（さをかりあかぬけしきよも舟酔などしていたづらよ日をふるがくるしきなり）男どちい、心やりにやあらん、からうたなどいふへし（男どちいさすがに詩などつくりてうたへるなりさるもやむを得ざる心やりにて去ひてゐびしさを忘れんとなり心やりい遣悶ともかきて思をやりうしなふなり俗よきゝらしといふが如し）舟もいださで、いさづらなれば、ある人のよめる

いそふりのよをるいそにい年月をいつともわろぬ雪

のみぞふる（いそぶりい波のいそにふるゝをもてやがてわらき波をいそぶりといいひしなり立波の間なく時なきさまをめなれていつもちて碎くる波の散のまがひを船中より見さらんよりまことの雪のごとくなる）へしこのうたはつねにせぬ人のことなり（此歌い平生うさよみなぜせぬ人れよめるといひていそぶりなぜ方言のまいよみたるをことゝれるなり）またある人のよめる

風による波のいそには鶯も春もはらぬ花のみぞさく（風の波をふきよするいそよゝ鶯も春もしらずはらぬ花のさくよとなり志ら浪を花よみなしてよめり）このうたともを、きこしよろしと聞て、舟のをさしけるおきな、日ごろのくるしき心やりによめる（人々のよめるうさぞもの中よ此歌そしよろしきよ屈したる心もやゝ引たちて舟長の翁ら日ころくるしらりし心やりよとてよゝさるおりこれ紀氏自らいふべし）

たつなみをゆきか花かとふくかぜによせつゝ人をはかるべらなる（たつなみさゝるゝさゝるよて欺ゆいへり前なる二首のうち一首い波を花よゝおしてよめるを引合波ゆきよよせいま一首い波を花よゝおしてよめるを引合せていへりよせつゝいことよそるを波のよするにゝゝていへり）このうさぞもを、人のなよろといふを、ゐる人のまたきゝて、ふけりてよめる（人々の何い志ゝ志ゝぐとあげつらふ事よて此歌ぞもの是非を評そるなり其評をきゝて或人の曰ゝく思ひ入さりしがよみさるとなりふ者るい物に深入りするをいふ）その歌よめる文字（モジ）、みそもじあまりなゝもじ、人みなはあらでわらふやうなり（歌い卅一字あるものにて文字あまりもなきにいはらねぞそいゝゝおらぞあいうおの四言のうちより入さるおるをさることもなくて卅七字ありしろば人みおさゝいも四言の入さるい耳さゝぞ其例をあぐれい二條院讃岐のうたに、ゐざつうみのかきはたはあひにゝつぐあまのいきも性きあへぞものをこそおもへとよめる句ごとに一字づゝあまりさり）歌ぬしいと、けしきあしくて、ゐまずおのがたまくしよみ出しさるうさを人々のゐ（ユニ本ハ）らへとゝいちざゝしくてゐらひがほもせぬなりまねべども、はまねびぞ、かけりともはよみあへがたかるべし、けふざにいひがたし、ましてのちよはいかならん（こゝさとへこゝうさをまねてもよみ得べくもあらぞゝろきさりとも人ゝよみえゝとおり此歌をきゝさる今さへいひがさきをもしこゝに志るさば後にとゝいうならんとてこゝにゝ志るさ

なり

十二日より此室津よりこまりしうば舟中の人々いうよおやましうりゝん舟君も日ごろのくるしさよさへうねて云ひてうゝるさい悩れごとなどをせめての心やりよ物せられしおらん

十九日日あしければ、ふねいださず日よりのわしなればあり

廿日きのふのやうなれど、舟いださず昨日のごとく日よりわしゝれば舟出せざるなり

みな人々うれへなげく、くるしく心もとなければ、たゞ日のへぬるかぞをけふいくか、廿日三十日と、かぞふればおよびも、そこなはれぬべし皆人々いつ漕出べきやと愁へなげきて心も落つゝねいさゝ舟出せしよりゝふよていくゝぞと日數のみゝぞへくて其をる指もいさみそこなるべしとおりいさづちよ日數へしまとをつよくいへるおりおよびいさゝ指の事おりおの省りてよびといふべきを口調よりてゆびといへるおり いとわびし、よるゝいをねず苦しく心もとなき難義のあまり臥ても眠らぎとおり 廿日の夜の月いでにけり、山のはもまくて、海の中よりぞいでくる海上なれば山のともなくて常よ見おれぬ海の中よりゝ月の出るとなりさて廿日の夜なるをもてとおらずも仲麿の故事を思ひ出たるおり

といひける人は、もろこしにわたりて元明天皇靈龜二年遣唐留學生となりてもろこしよゆかれしゝろへりきたる時に、舟にのるべき所にて、かの國人うまのはなむけし、わかれをしみて、かしこのからうさ、つくりなどしける仲麿のゝへりこむとせられし時なり所い明州の海邊おりさてそこよて王維包佶等をかれを惜みて詩などはくれりをいふ

あかぎやありけん、廿日の夜の月いづるまでぞありける、

その月は海よりぞ、いでける あごり盡すやわりゝん廿日の月は出るまろまで酒くみ詩おぎ作りかゝせしおり今夜の月よ故郷を思ふ心れ同ドゝれば更よそのかみをおもひいでられさるなりこれをみて、なかまろのぬし我國には、かゝる歌なん神代より、神もよみたび、今はかみなかたもの人も、かうやうにわゝれをしみ、よろこびも

あり、かなしみもある時には、よむとてよめりけるうた廿日の月の、はるゝよ海より出るを打ながめて仲麿はれぬし彼騒客らに打向ひて吾國よい歌といふものありて天地はじめて神の御代より始りて其神等もよみ給ひそれより傳へひろごりて今い貴賤となくふしなべてかくのごとく別れよのぞみ或い歡び或い悲しみある時よいかなる事なりとてよみ出されさり

あそうなばらふりさけみれはかすかなる三笠の山に出し月かも、とぞよめりける此歌古今集よゝ天の原としてのせられさり同ドく紀氏のあげられさるよゝくことなるい二やうよいひつさへしなるべしふりいふりえへ隠りかへるなどのふりよてさけい見さけ聞さけのさけるれば心とつけてむるかよ見ゐたしたるなり意い海上はるかよ打見やれば月こそいさし出たれ是ぞ年ごろ戀しゑひし彼ふるさてなる奈良の春日なる三笠山より出さる月ゐらんかとゐり

かの國人、きゝ志るまゝおうおもはゐたれど、ことの心を男もゞ、に、さまをかき出して、こゝのことゞつたへたる人に、いひ志らせけれゞ、心をやきゝゐたりけん、いとおもひのほかよなん、めでける唐人の聞き志るべきなければいゐでかとい思ひされどまづ此歌の意詞と漢文よ譯して日本語はたへゐぼへたる人よとくいひきかせければたれくもよく其意ときゝとりゝん思の外みゐ感賞したりとゐり」もろこしと、よの國とい、ことばことゐるものなれど、月のかげい、おなしことなるべけれゞ、人の心もおなしことよやらん、漢土と日本とい言語などいちがへと是所ニ付テハ後ノ考ヘ

やりて、ある人のよめる仲麿の事とも思ひしるり

みやこよて山のはに見し月なれどなみよりいで、なみにこそいれ都よりていつも東の山のもと出て西の山のもよ入るとのみ見ゐれし月の今宵い海原の波より波よ出入ゐげとみて仲麿ぬしの海原の月と望みて都ゐる三笠山と戀しまれたるよ同ド意ばへゐれどそのゐみと思ひやりてといいへるならん後撰集よ此歌と海よりいでゝと改めのせられたるい見ろし

よの段い安部仲麿の故事と思ひやりて海原のゝしきとのべられたる心も詞も一入奇妙なり深く味ひ志るべし

廿一日卯の時ゞかりにふなでせ、みな人々の舟いゞ、これ

をみれば春のうみに秋のこのはしも、ちれるやうにぞ
ありける（今朝いめづらしき晴と待えて此津より久しくかゝりし舟ども一時うかめる海上のなどしきとみれば春の海なるよ秋の木葉のちりうかべるやうなりといへるよ舟出のうれしきなどい自然よあらしれたり）おぼろけの、ねがひによりてに
やあらん、風もふろぎよき日いできてこぎもく（かぼろげのこの比の俗語）
（かぼろ〻あらぬといふべきをならぬと省きていへる俗語ならんこいおもくて輕からぬのさよて俗よ容易おらぬといふ義なりさて此日頃神佛を祈りて深く願ひし故よやはらんつひよ風もなぎてかくよきぎ日より出きてうれしくも漕ゆく事よとあり）このあいだにつかは
れんとて、つきてくるわらはあり、それがうさふうた（紀氏よめしつかはれんとてこたびの歸路よつき從ひて來たる童子なりそれがうたへる舟うたあり）
猶こそくにのかたはみやゝるれわがち、は、ありと
しおもへバかへらや、をうたふ、ぞあはれなる（人々いかゝる日和待つけてやがてよ引かへて此ゐらえいなゐ國のうたをかへりみて父母と思ひて故郷よ遠ざかる悲むさまあるがあもれありといひあへまうへらやゝ舟歌の拍子なる事前よ

もみえたるが如し）かくうたふをきゝつゝ、こぎくるにくろとりといふとり、いはほのうへにあつまりをり、そのいはのをもとに、なみ白ろくうちよせ（くろとりの十六夜日記よしろき洲ざきよくろきとりのむれゐたるゝ鵜といふ鳥あり〻〻りとあるを思へるこゝかぢとりのいふやう、くろ鳥のもとに、白ろき浪をよせとゞいふ、このことゞ何とにはなけれど、ものいふやうにぞきこえたる、人の程にあはねバ、とゞむるなり（鳥のくろきと涙の白きとゝいことよとえあると見めでゝ白ろ〻といふその詞風流めきたりさりとて何といふばかりならねどゝれら如きの人がらよゝ似ばかりしらぬ面白〻ればあやしみをがむるとなり物いふ云々いものゝ心しりて興ゐるこゝ可をいふやうなりとやめたるなりとがむゝ物をあやしめるこゝろなりかくいひつゝ、ゆくに、舟君なる人浪をみて、くによりはじめてかいぢく、むくいぜんといふなる事を、思ふうへに海のまたおそろしけれど（舟君波をみて思ひるゝよい土佐國と舟出せぬ始より賊等國守の命よてゝばく追捕せられしと

いきぞやり此たびの歸路を待て其報せんといへる事を傳きゝて愁へ思ふかがうへゝ又日ごろ風波のおそろしゝれば其心づかひ一方ならぜとなり

しらもみなきらけぬ、なゝそぢやそぢは、うみにあるものなりけり

世の諺ゝいたく愁ゝなへば白髪でかるといへりさて恐しさゝ一時ゝしらけたるさまゝ書きなし玉れは我へたるいくばくの齡ゝ

只此海中ゝこそ有つれといふ今年紀氏の齡七十三四歳ゐれぞなゝそぢやそぢといとれたるなり

わがかみのゆきといそべの志らなみといづれまさりおきつしまもり、ろぢとりいへ

申シテ見ヨ之有ル者ヨ

ゐり髪ゝ積れる雪でゝ磯邊ゝよる波といづれか志ろき沖津島守ゝ

まさり劣りをたづねてよかぢ取島守ゝ波なぞ常ゝ見ゐれて委しゐらんの意より楫取ゝしかいへでいひ傳へさせたる意なり

此ごろ南海ゝ前伊豫守藤原純友東國の賊首平の將門ゝ與力して海上を横行し或ゝ郡邑殘抄掠して狼籍甚しく朝廷ゝもて余されし時のことゐれば紀氏の恐れらるゝ事もさる事ぞかし

廿二日夜べのとまりより、こと、まりをおひてゆく、はるあに山見ゆ

異ナル者

昨夜のとまり港より外のでまりをお曳てゆくゝ山のみえさるなりとし九つばかりなる

わらは、としよりはをさなくぐある、このわらは、ふねをこぐまゝ〳〵山もゆくとみゆるを見て、あやしきことうたをぞよめる其うゝ

童男の年よりあとゐみ生質なるがとるかゝみゆる山の端の舟にはれてゆくやうにみゆるをみて怪しき事といひて歌ともよみ出たるとおり

こきてゆく舟ゝてみれはあしびきの山さへもくを松はしゝぞや、とぞいへる、をさなきわらはの事にては、につかはし

漕ヒたる舟のうちゝてみれば山のゆくやうゝみゆるを其山ゝたてる松ゝ山のゆくをば志らざるやとなり此歌の意をへとさなゝれはゐち

ゝの言ゝてゝ似つかゝしとおり

けふ海あらけ、磯にゆきふり、なみの花さけり、なる人のよめる

あらけゝ散殘よめれゝ海のとゝことおりて波のちるをいへり

波とのみひとへにきけどいろ見れはゆきとはなとにまがひぬるゝな

其音ゝたゝ波とのみひとへゝきゝつれど其色をみれば雪と花とゝ見まがひぬるとなり

彼のひらいの歌い古書ゑ舟行岸移といひ唐詩ゑ揚帆壁岸行とある意ゑ同じくしていひてとゑし或人の歌もさることなれど已ゑ彼と垂て花とゑ見さてたることわれも珍らしからぬ紀氏の歌ゑい似つかいしからぬ

廿三日 てりてくもりぬ、このわたり海賊のおそりといへば、ろみはとけをいのる朝れうち去し日てりてまたくもれるなりおそりい恐みて皇てれとゑのよはせたるこの比の俗言といふべし

廿四日 きのふのおなじところなり昨日ゑ同し泊なるべしきのふの條ゑ去るされねば所の名い去られぬ

廿五日 かぢとりらの、きたろぜあしといへば舟いださぢ、海賊おひくといふこと、たゑずきこゆ海賊の追ひ來るといふこと海陸の便ゑたえす告るおりされば北風わし吹れば舟をいだしがたく舟中の人々いかゑ心苦しき事おりけん

廿六日 まことにやあらん、ゐいぞくおひくといへバ、夜半（ヨナカ）

むかりより、ふねをいだして（いよ〳〵海賊の追來るべきよし實説ゑきこゆれ也今は順風とまちあへぬ夜ふあく舟を出せしおり）こぎくるみちに、さむけをるところあり（さむけは手をもさ物とむ吹奉るよりいへりされ也山路ゑも海路ゑもついがなからんやうゑと神ゑいのるべき所あり）かぢとりして、ぬさたいまつらをるに、ぬさのひんぐしへちれバかぢとりのまうしたいまつるゑとは、このぬさのちるかたにみふねをみやかに、こぎしめたまへと申てたいまつる、これをきゝて、あるわらはのよめるゆくゑさゑみふねをはやくやちしめ給へと祈念して奉りさるゑ東のゆくゑさにちれバ東へこぎゆくなり」これをきゝてあるゑらいのよめりしおり（ぬさい幣おりうぢてりにぬさを奉らするゑ楫取の申し上るこてバに此ぬさのちり

わたづみのちふりのかみにたむけをるぬさのおひかぜやまぜふかなん、とぞよめる（今このゑさづみ海原づみのちぬけの神に願ひ奉りて手向まひらする幣の吹さそいる義ゑていづくゑまれ其道ゑ幸ある神なるゆし貫之集ゑ「ゆくゑ〳〵ふもゑのへらん其追手の風吹つゝきてゑやく都へつちしめ給へと願ふなりちふかい道觸の神なるゆし貫之集ゑ「ゆくゑ〳〵ふもゑのへらん

時も玉鉾のちぶりの神を祈れとぞ思ふとあると此歌のみにてらく紀氏のよまれし外よみえねばいかにともさだめがたしとなりヨらいのよめるとあるい例のなりしい童の歌ともおぼえぢ

このあひだに、かぜよければ、かぢとりいたくほこりて、舟にはあげよなどよろこぶかくするうちよ風ふきなほれば此幣のちるかたにといひし楫取等いのり得がかよいさくほこりてはあげよなどいへりほこりむ秀起の義にも俗に鼻高くするといふやぢの心なりその音をきゝて、わらはもおきなも、いつしかとし思へゞにやあらん、いたくよろこぶ帆をあぐる音をきゝてとあるを後の歌のほでうちてといふへらけてみるべしこの中に、あゐぢのたうえといふ人の、よめるうた

とうめいとめをのべたる詞なりとめい姥よで老女をいへり

おひかせのふきくる時ゝゆくふねのほでうちてこそうれしかりけれ、とぞ、ていけのとにつけていへる

やていい帆の手よで帆綱をいふ帆足ともいへりされば船の帆よいひかけて此頃物をよろこぶ時手なとうちてよろこぶをほてうつといひしならんていけい天氣なり天氣のよきよつけてたれもみおよろこびあへるをいふなり

此よ辨ふべしぬさい願総の義よて神よねがひ事ある折奉る絹布麻の類をいふ古へい旅立するよ絹布を尺ながら携へしを後よい細のよ切たるを袋よいれてもたるをさるべき所々ようちゝらしてたむけてするなり

廿七日あぜふき、なみあらけれバ、舟いださず、これろれ、かしこくなげく

また北風吹出て舟をやりがたく泊よもあらぬ所よ舟をとめたればみるくおそろしくてかなしみなげくをいふ

男たちの心なぐさめに、ろうたに、日をのぞめば都とやし、などいふなる事のさまをきゝて、ある女のよめるうた

大酒！望レ日長安遠といふこゝろをうたへるなるべし此故事い晋書よ元帝の子明帝いまだ五六歳の時父帝の膝前よありし時長安より使來れり因て元帝問ゐるゝよ日と長安といづれか遠きこたへて長安近しといふそゝいかにと問ゐるゝよ人の日邊より來ちざれバなりと帝これを奇として明日群臣を宴して昨日の如く問ゐるゝよ日近とまたふ帝色を失ひてどてこたへのことなるや目をあぐれゝ日をみれと長安いみえぢと帝ますゝ奇ぢせりとなり

日をだにもなのまぐもちあく見るものを都へと思ふ道

のはるけさ（天雲い遠きといへる枕詞なるを近くといへるいとおもしろし）またあるひとのよゑる

ふくかぜのたゑぬかぎりしたちくれゞなみぢはいと

ゞはるけかりけり、日ひと日かぜやまぢ、つまはゞきをし

てねぬ（風のふきやまぬかぎりいと波もねたやまれねいまれがためるひまぢりていよ〳〵もるけく思いるゝとなりつまとじきい彈指まゑ爪彈ともろきて物をよくみ疎ぢる時よせしとざなり）（ハカドラ又樣ニ異フ上ニ）

せめてもの心なまぐさようたからうたなぢ物するもたゞ苦しきわまりの心やりにおむ實に舟出せしより數多の日かぢとへされど大かた風のふきつゞきたれゞいかようらめしくいあにねさくやありけん

廿八日よをぢがらあめやまぢ、けさも（廿七日の終夜雨ふりてけさもやまざるなり）

廿九日ふねいだしてゆく、うらく〳〵とてりてこぎゆく（きのふの雨風なぎてよき日よりとなりしなりうらく〳〵の春乃日のいどのなるをいふ春日遲々ともあけりてりてこぎゆくとはいきたるい語を反さぬに似たれどもすべてそのうみかゝる所乃て乃字い今の心とかゝりて此てにて語乃きるい事なり日いうらく〳〵とてりてさてこぎゆくといへるなり廿一日によき日いできて

漕ゆくとあるも同し例なり）つめのながくなりたるを見て、日をかぞふれど、

けふは子の日なれゞきらぢ（けふしもめづらしく春のうちに心ものどやきて爪の延たるが目につき其爪きらんとて十二支をかぞふれゞ子の日にあたれり陰陽家の書に丑乃日い手の爪寅の日い足の爪きるよしみえたれゞ丑乃日を待なり）むつ

きなれゞ、京の子の日のことい（正月）ひいで、、小松もがなといへど、海なかなれバかたしかし（子の日につき思ひ出たるなり、むつきなきバといいまだむつきのうちなれバといふ意あり初子中の子もありしと心づつきたる旅中のさまなりさて都いさこそと思ひやるよつゝて小松ぞよなれが

しといへれど、船中なれゞそれもうるる事かしとなりおしい事たゞ決する詞もあれど俗よゝやそふなどいふほどの詞なり）ある女のかき

ていだせるうた

おぼつかなけふは子の日かあまならゞうこまつをざ

にひかましものを、とぞいへる、海にて子の日のうさ、いか

ゞあらん（ほふい子の日おるのおぼつのお實よ子の日おれゞ海底よ生るうみ松とざよひのましを海人ならねゞそれもえがたしとなりうみ

まさい海中のみるといふみるを海松とかけれバ文字よつきてそか思ひよられたる紀氏のうたなるべしきて子日い野よてそるものなれバ海よての子日い歌よいよみえがたきを是いいゃゐらんあしなりまたある人のよめるうたのちざるよ非ぞやとはのめあされたるなり

けふなれど若菜もつまぞ春日野のわゞよきわたるうらになけれバ、かくいひつゝ、こぎゆく（けふい子の日おれど若菜つむことゝもせぞさるいゐくこぎヨさる海邊よ春日野おけれバとなり若菜といへバ多く春日野よいひなれたれバなり）

正月子日よ松と引若菜とつひことをいひたるよ倚松樹以摩腰習風霜之難犯也和菜羹而啜日期氣味克調也と管家文章よ見えたりこれらの意おるべし

かくいひつゝ、こぎゆく、おもしろきところにふねをよせて、こゝやいづことゞひけれバ、土佐のとまりとぞいひける（土佐の泊い土佐國土佐郡みいおらで阿波國おる鳴門よ近ゐところおりといへ）むかし、とさといひける所に住ける女、この舟にまゞりけり、それぞいひける、むかし（三三年秋）ありし所の、名たぐひにぞあなる、あはれといひてよめるうた（ひゐ、し土佐といひける所にすみける女もい紀氏みつかゐ、おぼめかしてんへるなりさるに此ごろを昔しといひおし土佐國と土佐といひ自ちのうへを住ける女といひて土佐に住たりしい女壹人のごとく書きおせるいいとおもしろし）

としごろをこゝとところのなよしおへバ（頁持て）きよるい來寄る波といへり、なもれもあはれとぞみる（おづかしぐゆかしきをいへり）

卅日あめかぜふるぞ、海賊い夜ありきせざなりと聞て、夜おあばありよ、舟をいざして、阿波のみとをわたる（鳴門ケ彼海賊い夜陰よ忍ぶよ）夜中なれバ、にしひんぐしをみるぞ、男をんな、かゝく神佛をいのりて、みとをわたりぬ（今までい四國の地を傳ひ來りまれより海をよこぎりて和泉國よヨたる所なれバとりヨけ忍あらぞ書を便利としで追來るよしと聞てさらバ此風雨なき夜のほどよりよ土佐の泊を漕きいで行くなり）

かりに、奴島といふ所を過て、田無川（タナシ）といふ所をわたる、か（元なくまさかいる所よて海賊よ出合さらんよいゆいしき一大事おれば男も女も一心よ神佛を祈りしもさる事なり）とらうの時ぞ

困苦難堪

らくいそぎて和泉の灘といふ所にいさりぬ（奴嶋ハ淡路國のぬトまが崎あり田無川ハ和泉の田川なるべしと云りいづミのなだハ和泉國和泉郡和泉郷ありそこの灘なるべし）けふ海に波に似たるものなし、神佛のめぐみ恤に似たり（のらくして彼の和泉の灘をもたるゆ明もたりたる海上を見れバけふハ一點の波らしきものもなく實ハのどゆき日なりこハ先ハ祈りし神佛のめぐみあとれみましてかくハあまつるならんとなり似さりハうゝだりいとぬ謙辭）

君四忘

なりけふねにのりし日より、かそふれば、みそかあまりこゝぬゝになりにけり、いまハいづみのくに、きぬれバ海賊もろならぞ（かの舟ハのりし日よりまつ和泉國までと願ひしがやうくく三十九日めハらうして着たりといふされど追來るといふ海賊も恐るゝハたらぞと落つきよろこぶなり）

変合イ

こゝハ海賊夜行せずといへるを古來いぶのしく思ふ人も多かるべけれど此頃藤原純友の黨類起りてゆゝしきさゝぎとなりハさたれば朝廷ハすち此賊徒平攘の爲山陽南海道の諸神社ハ奉幣使を立らるゝのみならず追捕海賊使とも次々ハ差向らるゝ折ふれど實ハおぢかしこまれしもさる事ぞのし

二月朝日朝のま雨ふり、うまの時バかりに、やみぬれバ和泉の灘といふ所より、出てこぎゆく海のうへきのふのごとく、風波見ねず（ねしたの雨晝より晴てこぎゆくまいハ又昨日ハかゝらぬよき日よりてなりしなり）黒崎の松原をへてゆく、ところの名はくろく、松の色は青く、いその波は、雪のごとくに白く、貝の色はをはうにて、五色にいまひといろぞたらぬ（五色ハ青黄赤白黒なり赤きハ貝ハ色の蘇枋なるハみもたせたれど五色ハ黄が一色たらぞとなり）このあひだに、けふはこの浦をいふ所より、つなでひきてゆく、かくゆくあひだに、ある人のよめるうた（はこの浦ハ泉州日根郡箱作村にありなでハ和名抄に挽船細とあるがごてし）

玉くしげはこの浦なみたゝぬ日はうみをかゞみとたれか見ざらん（玉匣ハ箱の浦といふ枕詞なから海を鏡といふまでみゝれ鏡ハ櫛笥に乘れるものなれバなり）また舟君のいはく、よろ月までなりぬることゝて、なげきてくる

しきにたへぞして、人もいふことゝて心やりにいへるうた

舟君と例の紀氏自らいへり去年十二月舟出して正月もすぎ今二月にもなりにされどなり二月は海上ゑ恐るゝ時なりさるを思ひ乃外にさいりきて今日いはやその二月もいふになりぬと打なげかれさるなゝ余りに長き舟ぢまひを苦しみとびて人々もいへばいふとて時のさまをされば みてゝゝれし也

ゐをふねのつなでのながき春乃日をよそかいかまでわれはへにけり

初二句い長きていとん為めにやがて時乃さまを序とせりの消得し くも長き春の日をはや四五十日もへゑけりいつまでたゝよひて有るべきことゝのいとおげきさるなり

きく人のおもへるやう、なぞたゞ事なるとひそかにいふべし

たゞことゝいこことばをもうざらすいへるをいふこの歌てのくかもしろかちぬこてをうたにいよまれしとひそかにいへるなるべしとなり

ふな君のから軽ウジノくひねりいだして、よしと思へる事を、わしもこそ誣シヒへとて、さゞめきてやみぬ

さて人々は舟君の案ドめぐらしてよしと思ひさざめていひ出られさるをいうにとろく思へゞとてさのみい えもこそ去ひいへとてみなさゝやきあひたりてなりひねり出すは出がてなると去ぶり出すやう乃意にてのらくしてやうくゝみよめるをいふ誣へい強言にて去ひてあげつらと

んもいかゝとはゝうる意なり去ひいへを略としたるい這入るをはれりといふがごとし

にはかゑ風なみたかけれバとゞまりぬ

按ふゑ二八月てて必暴風の發るべき月なれば最も海上にかそるゝ時なりされば正月にいてく入洛すべき心がまへゑて出船せられしおらんを思ひなりぬればいろに心元なき事なりけの外にさとりきて二月ていふゑなりも思ひ合せられていとゞびしうなむん果して住の江の危難ありしをも思ひ

二日雨風やまぢ、日ひとひよもすがら、神佛をいのるひるもよるも

かみやとけをいのりてあかせしてなり

三日海のうへ、きのふ乃やうなれば、舟いださぢ、あぜのふくことやまねば、きしの浪立ろへる、これにつけてよめるうゝ

ちら涙い昨日ゑかとらねゞ舟出さずとなり浜立かへるとい彼のしくゞよるがうへにはよるをいへるゑゝて引きかへる袁かへるなどのかへるに同ド

緒をよりてゝひおきものはおちつもるなこゞのたまをぬかぬなりけり、おくてけふいくれぬ

緒をいよゐなれゞ其かひもなきものいかくおちたまれ

る涙のたまをばえぬきとめもせでいふなみざといふに波をかけたるいこれにつけてもよめるとあるよて知べしなみざい風やまで日數をふることを歎く涙なり緒とよりてといへるい船中のつれ〻〻よさるわざせしにそあらむ

四日かぢとり、けふ風くものけしき、はなはだあしといひて、舟いださずなりぬ、志かふかれども終日よ波風たゝぜ、おろかぢとりい、日もはかゝはぬ、かたゐなりけり（かぢとりいすべてよく天氣を見さざむるものなるをかくよき天氣なると甚よあしくといひてとゞめたることをとらざゝしく思ひてかたゐなりまたゐい井居にて身体不具なるものい正しく座するこでわさむ者そばみ傾く顔あるよりいへるなり俗て癇疾の者をもいへり）このとまりのはまにはくさぐさのうるはしき貝いしなど、おほかり、かゝれどたゞ、むかしの人をこひつゝ、船なる人のよめる（實に此濱邊ろ〻〻の貝石多くあつかしき所なれども今もい同じさまにもぜんなりて思ひ出てよめるなり、船なる人乃といへるよて余乃人ゝ濱邊よたり立て遊べることとしるし）

よせるなみうちをよせ、なん、わがこふるひとわすれがひおりてひろはん（ふする波よ世なんさら波よ同じく〻〻をかるる人を思ふる貝をも打寄こ拾ハヤたん）といへれば、ある人たへぎして、船の心やりによめる（右の歌を記して或人悲みよたへずして船中の心やりよ発るなり）

わすれ貝ひろひしもせど、志ら玉をこふるをだにもかたみとおもはん、となんいへる（此い前の歌をうけたるみてよしや波のよせたりとも忘貝い吾り更よひろはゞ彼の忘れがなる白玉をば戀慕ふをなお世めて形見と思ひなんといふ玉や貝やの同ド渚のものなればやがて亡兒よたとへていへり兒を玉よさとふると常なり）

となんいへる女兒のためには、おやをさなくなりぬべし（尚も今も子を思ふの情露もかはらざりしかるに子なりぬといふさるい忘貝を拾ひて忘れんといひ又ひろはゞ志しるして亡すれぬをかたみよせんといふ玉ならぞもありけんをと、人いはんや、ふるもみなをさな言なり）

されども志ましこ、かゝよかりきと、いふやうもあり（親のよく目よ

白玉などいへれど人も玉にもみえざりしといひ落さんやされども玉にもみえざりしよりも顔よりしやうゑ思ふとあり

ゑゑし子は今いきてゐりしよりも顔よりしやうゑ思ふとあり

なはおなじ所に、日をふることをなげきて、あるをんなのよめるうた

幾日になく和泉國より日をふることをうらめしく思ひなげきてよめるあり猶いかゝちぬ意よてやはりとゝふ義なり

手をひで、さむさも忘らぬいづみにぞくむとはなしに

日ごろへにける

泉なれば手をひたせいさむりるべきゑこれは其名のみひでいひたしさありひちてともいへりさてまことのなれどさるひやゝかなることもあく又くむにも結ぶとなくたゞ徒よ日をへぬる事よに打なげきたるなり

五日けふからくして、いづみのなだより、小津のとまりをおふ、松原めもはるゞるなり、かれこれくるしければ、よめるうた

もけどなはゆきやられぬはいもがうむをつのうらなる

婦人ガアミタル麻ニカケタルナリ、

きしの松原

上よりめもはるゝくにいひて岸乃松原の遙なるよ倦たるよりさりされはいもがうむいいひりけ乃みなり

よあらざるなり

かくいひつゝくるほどに、ふねとくこげ日のよきにともよはせゞ、かぢとりふゑ子どもにいはく

楫取どもいされみ入洛もいそがぬうへよ風乃また吹出んまでも心なければうくいもよはされたるあり

みふねより、おはせゞなり、あさきさのいでこぬさきよ、つなではやひけ

舟君よりいそげと仰せ賜へるなさらば朝北の吹出ぬさきよ速く引ゆけと陸路よむのひて綱手でる子等よはいりしなゝ朝北いわしさよ烈しくふく北風をいふ

といふ、ころおとばの歌のやうなるいろぢとりの、おのづゑゝの詞なり、ろぢとりいうつたへに、われ歌のやうなること、いふとよもあらぢきく人のあやゑくゝうためきてもいひつるかなとて、かきいだせれゞ、げにもこそ文字あまりなりけり

こい楫取の自然の詞よてひたすら歌のやうよいとんでの心がまへよもわらぢさい是をうたへより歌らしくをうしでを聞でりて書出してみたればげよ歌のもじかずよかなへりとて興ドあへりしなりうつたへなりうちつけよの意なり又ひでへよの意なり

意ともいへり

けふなみなたちそと、

ひとくひねもすに、いのるさるしありて、風波たゝぞ日よのよきにといいへるものゝさすがに楫取のわやぶむにおそれて風波おだやかなれども祈念するなり

終日

いまし、かもめむれゐて、あそぶ所あり、京のちかづくよろこびのあまりにあるわらはのよめる

いのりくるかさ間ともふをあやなくもかもめさへざになみとみもらん京の近づくうれしさにゆらいさへ歌よむこゝろよなりてそゝろよみ出たるなり歌の意いけふゝ波なたちそと終日いのりし其さるしの風間と思ひをるゝ鷗でさへも波とみえとかくよ心となやまずいわけもなたことなやといふみゆらんゝさう見えぞともあるべたと何よみゆらんとなり

をいひてゆくあひだよ、いしつといふところの松原、おもしろくて、はまべをはし石津ゝ和泉國なる高師濱なりてとる打開けたる松原也

右の歌よさへだよといへる詞誤りあるべく六帖よ此歌をなけてさへたゝとあるよさたがへる説もあれど諸本みなさえだよなれど諸本よさたかへるなり鎌倉右大臣の集よすらたよといふ詞みえさればさへだよともいふべきよや此詞の別をいとゝさへゝ副添なぞの字とゝきて物の順よそとる時よおきてあだらうなりだよゝ上の詞を屬ませてつよくいひつる辭なりといへり

又をみよしのわたりを、こぎゆくある人乃よめる住吉ゝすみのえとよむべたを此頃よとやすみよしともいひしなり

いま見てぞ身をゞさりぬる住の江の松よりさきにわれはへにけり住吉の松ゝとしふるなるふかたりけれなるものとおもひつるゝ今みれはわれゝ見馴し事を思ひ出られたるなり紀氏和泉の任よてあられし時常よ

かたときもわをれねゞよめる むかしへ人ゝいはしへ人といふゝ同りく當時の語なるべしこゝ先みうせ

をみの江にふねさしよせよわをれぐさ志るしありやとつみてゆくべく、となん草ゝ萱草ゝ書り此草住吉よ多くよめりすれば住の江ゝ舟をよせてよゝすれ草をつみなばゝいるなゝきもしやゝするゝもあらんなれべつみてゆかんとなり事うつたへに、わをれなんとに

はあらで、戀しきこゝちもむしやきをして、又もこふるちから
にせんとなるべし（これ前の歌みな草をつみせはすれんとかまみたれやも佛ゑ目もれるてれれいなるらずあはりこふる心の苦しきゆゑ之去しやすめてさて又戀ひつのちん爲のちから草よせんとなりなけきの切なるを思ふべし）かくいひて、な
ごめつゝくるあひだに、ゆくりなく風ふきて、こげども
く、去りへ去ぞきに去ぞきて、やゝくしくうちはめつ
べし（ながめいもの思ふ事あるよいへりさされはうせよし子の事を思ひ出して打ながめつゝゆくりをいふゆくりなきに不意とおきく思ひがけなくといふ意なり去りへしぞきいわとしざりなりやゝくい殆の義なり、其きいまでせまれるをいふ打ながめつべしりに打まもりくつかへらんとするをいふ）かぢ
とりのいはを、このをみよしの明神は、れいの神ぞかし、は
しきものぞおはをらんとは、いま見くものかみ（明神いあきつみかみとよみし現在の天皇をさしてまをす詞なれども古書に神をも去かいへり住吉明神の大神なり例いの神といいつもやしきものおいすれば波風をおこし給へる事まいあるをいへり例いまめくとい今の世の物はしが聞とかめていへる記者の詞なり）さてぬさをたいまつ

り給へと、いふに從ひて、ぬさたいまつる（ぬさいまつるい前は出さりさかくたいまつれども、もはら風やまでいやふきに、いやたち
に、風波のあやふければ（いやい彌をよみて其上なるをいへり）かぢとり又いはく、ぬ
さは御心のもるねい、御舟もゆかぬなり、なはうれしと、
おもひたぶへきものたいまつりたべといふ（給又いへるやう幣はかりの物よい神の御心とまらねい猶神の悅び給ふものの奉り給へといふ給ふをたぶといふい畧せる詞よて今もいへり）又いふに去たがひて、
いかゞはせんとて、まなこもこそふたつあれ、さだひとつ
ある鏡を、たいまつるとて、海よ打はめつれゞいとくちを
し、さればうちつけにうみは鏡のごとなりぬれゞあ
る人のよめるうた（眼をかり大切なるものゝなけれとそれもこそ二つあれこれかとりなきたい一つある秘藏の鏡なれども是を奉るとなりさて鏡を海よいれたれやかて其驗なり、海も鏡の如く風波なきてたひらかよなりたるなり）

ちはやふる神の心をある、うみよろゞみをいれてかつ見つるかな（此歌いわるゝ海よ鏡をいれて神の納受ありやいなやを試みつるよとたして神のかしがり給ひしことをもゝ去りたりとなりかいふ意なり）いたくすみのえのわすれ草、きしの姫松などいふ、かみにはあらぜかし（常なつかしく住のえのすれ草岸の姫まつなどいひもやし歌などよみなれさるよ此たびのさまをみれバさる優しき神よいわらでいたく物をむさぼりわらぶる神よませるよとおもめよくむのたゝいへりいたくい強くわたる語よて事のきびしきみいへり）めもうつらく、鏡に神のこゝろをこそは見つれ、かぢとりの心は神の御心なりけり（うつらくいつらくみるていふよ今一きい見こむ方のつよき語よすゑ目もふらもといふほどの語なりさて鏡を奉りて風波をづまりなれハ鏡よ神乃御心をみしとなりみるい鏡よかゝていへり楫取の言よ從ひてかゝるをるしなりつれバ楫取乃心い神の御心と同じことなり）

此處い舟中乃一大難といふべきあやふかりし所なれば舟中の人々如何よ心苦しくかしこまれつらんと意も詞もともよわされ興しさるさまよ書れたるい例の日記かりもとより乃實錄ならんよい彼鏡を納受ありし神慮のほどと添み敬ひ謹みて記し置れつらん事論なきも乃なり

六日（みをつくしろもとよりいで、難波津につきて、河をのぼりにいる（みをはくしい澪標と書れと水派の申の義なり水派をゐるして水の淺深をゐらゐむるもれなり河尻い都の方を川上でしすい入る言なり今い川口といふ）みな人々、女をさなきもの、ひさひに手をあてゝ、よろこぶまと二つなし（ひたひよ手をあはるいさくよろこぶさまをいふ都の近くなるを婦人幼兒い手ゐあげてよろこぶこと一うたならぬをいふ）かの船醉の、あはぢの島の巨子（オホイコ）、みやこ近くなりぬといふを、よろこびてふなそこより、かしらをもたげてかくぞいへる（巨子いおほいことよみて大姉子おといふがごとしさて巨子い舟醉して船底よ首をつたつゝて苦しみゐられしも人々れよろこぶときいて其首をもちあげてうたをよまれたるなり）

いつしかといぶせかりつる難波がたあしこぎそけてみふねきにけり（いぶせかりい鬱悒など現よみて心もとなきをいへり今い難波江のあしねをゐこぎさゝて御舟のきいまできたりしなり）いやを思ひのほかなる人のいへれば、人々なのやしがる、これ

が中にこゝちなやむ舟君、いたく絶でゝ、舟醉〜たまひし
みかほには、似もあるかなといひける巨子といはも舟醉してなやみゐられしを思ひのほかを首をあげてかゝふうたをよめば人々いこれをあやしみ舟君いいさくその歌、をめづらしがるまた今までおもやみ臥たりしも川尻まやりたるれしさをがほつきまで舟醉しなりしやうゐいあらずてなり

按ふを前をい淡路のたう先といひこゝをいわとおの島の巨子とありまたおきな人ひとりたうめなるが中を云々とみえ次をい淡路のごともなりてれつも紀氏おのかうへて並べて同し愚かなるつらを書なしてたれがたきとせられまたおのれと共をあがめて書れしを思へば紀氏の奥方なることを云るべしこいもとより女をなりて書れつれば妻と妹ともいひがたくかく名をつけられしなるべし

七日けふは川尻に舟いりたちて、こぎのぼるに、川の水ひてなやみわづらふ、舟のろぼることゝいとかたし川尻を入かいれて舟すゝみがたく行なやみ漕をつらはをいふ[引つらふい物をかゝいづらひてなやみ漕をつらはをいふ[引つらぐるしむをいへり]]ふなぎみの病者、もとよりこちごちしきひとにて、かうやうのことさらに云らざりけり病者い前をこゝちなやむ舟君ともあり て紀氏自らをいへりこちごちしいまる事をいをかうやうの事とい巨子の歌とうけてとされば みてかゝれしなりか、れども、なのはちのたうめろ、うたにゑで、、みやこぼこりにもやあらん、からくして、あやしきうたひねりいざせり、その歌云か無骨なりしバれども昨日のさうめのうなをいたくめでゝかつ都近くなれりし悅びのほこりかをゐれいがほを必うきたるをやあらんよべより案ドめくらしでわやじき、えせうたやうくを拾り出せるなり

きときては川のほりゐの水をあさみふねも我身もなづむけふかな、これいやまひをそれば よめるなるべし歌の意い來へき限來ゆめでまたこゝいを堀江川の水なをを逢て舟の行なやゆるのみか吾身も共をを苦み海の深きを恐れ來つるを今日いかなづ惱み煩ふてまり此日ごろい涙乃高きをへりて其水なきをうれへ川のなさきをくるしむをいへり舟君も此ごろ病をゐづらひをればかゝる歌もよめるなるべしてなり

とくと思ふ舟なやますは、わゞさめを水の心の、あさき

なりけり、むやく京へかへりつしのんと思ふまその舟をかく滯りおやまずいけなこのうたい、都ちかくなる、よろこびにたへぞーていへるなるべし、このうたい上の二首とかゝていへりあはぢろどのうたにおとれり、ねたきいはざらましものをと、くやしがるうちに、よるになりてねよけりこの歌ども淡路の御のうなゐもおとれりけれどもけれからなまおかよはとさらましものをと悔しがるうちに夜のふけたりとおり、御いすべて女と稱していへり伊勢のごひがきのごなど多し

淡路のごのうたをほめそやし舟君のとおろかしういひなせるい例のうちうへなるされがたおり

八日なほ川のほとりになづみて、とりかひの御牧といふほとりよ、とゞまる川尻より入て三日はもなれゝばとやも都より入べきを水なきよりてあほ川のやとりよなづみでけふもやうく鳥飼の御牧まで來てとゞまりぬとなり鳥飼い攝津國島下郡よりあり

こよひ舟君、れいの病おこりて、いさくなやむ日頃めつかれより衰老の様病などおこりたるなるらんある人、あざらかなるものもてきたり、よねしてかへりごとす、そとこどもひそろにいふなり、いひぼーてもつるとやいひぼい飯粒おり或人の鮮明なる魚をもてきたりしより米うのたされたるをみて下部どもにもるざれの陰口よとれがまことよ飯粒してのたらいぬひそかよいふれさまなりかうやうのことどもところどころにありけふせちみすれば魚もちひをのゝ事ともい多のれども零してのゝずとなりゝ々ふい節忌乃精進なれば魚をくいずとなり

せちみ乃事い正月十四日の條よいへり紀氏の才智をもて佛況わがめらるいかくのごとし此御代ごろの佛のさかりなりし事おもひしらるゝあり

九日こゝろもとなきに、あけぬから、舟をひきつゝのぞれども川の水なければ、ねざりにのみぞねざる心もなきい心の落つかざるをいふ都も近くなりたるよかくとゞこほれることのこころぐるしさよ心落つきていもねられぬよむや夜もあけされど網手ひろせてのぼれどもあやよくよ此日頃雨ふらで水なければ舟すゝりて進みがたきあり

ころあひだに、和田のとまりの、あぢれのとおろといふ所あり、米魚あるとこへばおくりつ此あひだよ和田といへる所

い昔も今もたこえずさざの誤りよやあらんあがれの所い人の行ヒかるゝ所よて今のおいぬけのてとおるべし あくて舟ひきの
ぼるになぎさの院といふ所を見つゝゆく、この院むかし
を思ひやりてみれむおもしろかりけるところなり渚の院い河内國交
野郡なり今いやゝ遠ざりよたれど昔しい此川筋彼院の側を通りしるり去りへなる岡には、松の木どを
あり、なかの庭には梅の花さけり、こゝに人々のいはく、こ
れむかし名高く、きこえたる所なり、惟喬(コレタカ)のみこの御とも
に、在原業平(アリハラノナリヒラ)の中將の世の中にたえて櫻のさかざらは
春乃心はのどけからまし、といふ歌よめる所なり惟喬親王の御供よ業平
朝臣の仕へ奉りて此所よ物したまひし折よよまれたる歌なり一首の意い花の
さかぬほどい咲とまちさきし時いちるを惜しみ盛なるほども雨をいとひ風を
おそれなどして愛するあまりよ心のいとまなくていかがみのとけかちんといひて花を
いなくなりせば春の心のかくせばじくなくて世乃櫻といふもの
深く愛するの情をのべらきたり いま、きようある人、所に似たる歌よめり この舟中の人

々の中すぐれて興せる人をいへり例の紀氏自らいへるなるべし所よ似た
るとい古の主意とつたえて今の此所ねさまよもよつかとしきをいへり

千世へたる松よいあれどいにしへのこゑ乃さむさはか
はらざりけり此歌去りへなる岡の松をよめり千世へ年經ト調ふ貌へいたいふりたるといへ
りむかしと今とい物ごとよかとりはてたれども松風乃高き
去らべの聲のみい今よかいちぢとなりこゑのさむさといへるみさびしく
すごた意ありて昔の人れけざかゝりし操の色も思ひやられていとゆのしま
たなる人のよめる

きみこひて世をふる宿の梅の花むかしの香にぞおはよ
ゆひける此歌も彼の中の庭の梅をよめり君こひては惟喬のみこをさせり
世をふる宿い渚の院といへりさて渚の院も今はあれはてたれど
梅の花ぞのりはおは昔しのまゝよにはへりとあ
りし世のさまをおもひやられていとなづのし といひつゝぞ、みやこ
のちかづくをよろこびつゝのぼる去ろ歌などよみつゝのぼりゆ
くよ都のちかづくとよろこびゆ
しかりかくのぼる人々の中に、京よりくだりしときに、みな人
子どもなありき、いたれりしくにゝて、子うめるものども

ありあへる、みな人舟のとまる所に、子をいだきつゝおりのぼりす、これをみて、むかしのこのはゝ、かなしきにたへぞして京よりくだりし時よは皆人の子どもなかりしよといひて自らわらはしこととといへりさるよ人々い土佐の國よてまうけたる人もありわへるとありさてその人々の子をいざきておりのぼるさまをみていのよかなしかりけん

なありしもありつゝかへる人の子をありしもなくてくるゞかなしさ、といひてぞなきける此歌の意は明らかなり自然よ出たる歌よていとかおしちゝも、これをきゝていろゞあらん、かうやうのことうさ、このむとてあるにしもあらざるべし、もろこしをこゝもおもふよとにたへぬ時のわざとかかいる歌い必ず歌ことはひ心よまかせたるすさびならずもろこし人もこゝ乃國人も思ひよ堪ざる折よ自らいひ出るものときいしかじつよさることぞかじといへる意あり

所にとまる宇土野い今鵜殿と書けり攝津島上郡あり こよひ宇土野といふ

此條はとゞめよ引のぼる舟中のさまをいひ次よ渚の院よむかひしとき之の びまた都の近つくをよろこびて俄よ女子のことを思ひ出たるなど思ひまよ

うけもして眞情をのべられたるよて自ら變幻出沒の思ひをおせり

十日さいることありて、のゞらを此日はやごとなき事ありて舟をいだされざるなり

十一日雨いさゝかふりてやみぬ、かくてさしのぼるに東乃かたに、山のよこをれるを見て、人にをへゞ、八幡乃宮といふ、これをきゝて人々、をがみたてまつる綱手を引やめて掉さしのぼる東のかたよ

男山みえよりよこをれるは横折の義よで山の形のよこたをれるをいへり石清水八幡宮は貞觀元年の建立なり

うれしき事かぎりなし此橋いそのかみ三大橋の一よして世よ知る所なり今の橋本の宿其跡なりといふさて此橋のみえそめたるいかをかりかうれしかりけん

こゝに相應寺のほとりに、おもしふねをとゞめてとかくさだむることあり相應寺い橋れ西づめの南よわり其橋本に舟をつなぎて京よ入るの用意を何くはとをかまえらぶるを定むる事なりといへり

この寺の岸のほとりに、柳おほく

あり、ある人この柳のかげの、川のそこにうつれるをみて

よめるうた 植つゞけさる柳の影の水底よりうつりて一筋れみゆる川岸のけしきと或人のよめるとあり

さゞれなみよするあやをぞ青柳のかげのいとゝしておる

かとぞみる きれなみは万葉にも小浪をよめれ共さゝ波に同じけれどさゝ波は河よりひろれたりよするあやは波文をよりやはらかしていへかはやとはふよりは陰乃色しておるといへるなり

十二日やまさきにとまれり 山崎は山城の乙訓郡なり猶船中なれは山城の川なるべし

十三日なを山崎 山崎はありとはふをよ文字にふくめたるなり

十四日雨ふる、けふくるまゝ京へとりにやる ひいより車にて京へ人ちんとてのりにやられたり

十五日けふ車ゐてきたれり、舟のむつかしさに、舟より人の家にうつる 歸京はあす十六日とさだめたれども永々の舟中はわきえていむづかしければ人の家へうつりしなりむづかしきいとづらはしきとゝむ

さくろしき意ともいへり この人の家よろこべるやうなれば、あるゝ

ゐたり 此人の家はうつりたるは家人ども打よろこびて馳走せしなりやうなれはおぼめきいへるなり このあるゝの

よきをみるは、うさておもをもは 上のあるゝは家主下のあるゝは饗應をいへりされば家主の人がらもよきまた

又饗應もよくとはいへるなれば又はいへりうたてはまりありとも

よの常あらずともとけりてはいにてはきのどくはいへる程の意也 いろく

にゝへりごとを、家の人のいでいりにくげなゝぞるや、

かなりかへりごとすはそれ〳〵はそのむくゐをするなりさて此家人の進退をみるに久しく田舎はみおれし無骨のふるまひにことかとりていてやさしくねやかはかとはいうやくしく禮儀の正しくさまをいへりねやは敬禮の義やかはゆるやかはよぎやかのやうはて物淑形容したる語なり

十六日けふの夕つかた京へのぼるついでにみれば、山崎

のたなゐる小櫃の繪も、まがりのはらのかたも、かはらざ

りけり 都へ入るは夜はあるいて定められたれば山崎淀夕つかたさはれしなりさるは長く舟中の惱みはやつれたてゝ國守歸洛の正しきはそひもあけれはいたく忍ばれたるなるべし棚は店をいへり小櫃の繪は女兒のもてあそびものにて小櫃に丹青にて繪をとりきたるなり玉のりのはらのかたは餅を

蓮の如くしてつくりたるもはなりまがりは勾餅とかきて曲りたる形はよりいへりはらは法螺の形なるをいへり此山崎の名物は昔しのまゝなりといへり

うる人の心をぞ、さらぬとぞいふなる（それをうる人の心いかゝありやいかゝあらん知られず）かくて京へゆくに、島坂にて、人あるゞ志さり、あならぞしもあるまゞきわざなり、たちてゆきし時よりゝ、くる時ぞ人ゝとかくありける、これにもそれよも、かへりごとをせず（嶋坂ゝ向明神の南よ小坂あり此所なりしといへり人あるじ志たりゝゆくりなくていでむかひなどして饗應せしがおもはずなりしが過たるゝまゞたゞそれいゝもれたるなるの人出立の時は疎略なりしが考ふは思ひの外なるよりて志かいそれねり最初に國人の心ろ常として今ととて見えざなるを云々とあるをうけてみるべし）夜になして京にはいらんと思へゞ、いそぎしもせぬほどに、月いでぬゝつら川、月のあかきにぞわたる、ひとびとのいはく、此川あきか川にあらねばふちせさらに、かはらざりけりといひて、ある人のよめるうた（十六夜の月もはや出たれいゝ桂川とゞ其光よりさられしゝ此川ゝさるこゝおく淵も瀬もむらしよかとちざりしゝなりありさてかの大和なる飛鳥川ゝいと淺くして淵瀬もさだまらぬよ）

久かたの月よおひたるかつら川そこなるかげもかはらざりけり（月の中よ生たるゝてふ桂の川なれゞやかて水底よりつるも同ゝかげよて月中の思ひをなせるなり）

あま雲のはるかなりつる桂川袖をひてゝもわたりぬるかな（天雲ゝとるかの枕詞なり扨長ち船路よいと遙よも思ひつる此川にゝふは袖をひたしてもわたる事よとよるこゝべるあり）又ある人よめり

かつら川わゞ心にもかよはねど同ゞふかさになゞるべらなり（もるく思ひたりける我心にゝよひたるよもあらねゞ彌ゝがかゝりきたるよろこびの心と同し深さにかよひて流れるやうなりゝいへり）

都のうれしきあまりに、歌をあまりぞ、おほかる（さきに京の近づく都近く都にいらんゝするなゞ多のれゞこゝよいるなりさて嬉しきあまりよ歌もあまりゝたゝみていへるは例あるこゝなり）

此三首の歌其語脈つらなれりそゝそゝじめ久方の月よ生たるとありて次に天雲のゝるのありはるゝのみいひて月の桂川を思ゝせ又其遙に思へるゝいふ心をうけて我心にもゝよゝねどゝいゝいへるあり

夜ふけて所どころも見ゆ、京にいりたちてうれし（月はあかけれども）

（夜陰なれば方かとみえされども都にいりさるがうれしたなり）いへにいたりて門にいるに、月あか

ければ、いとよくかりさまみゆ、きゝしよりもまして、いふ

がひなくぞ、こゞれやぶれたる（六年ぶりに我家のあれたるを月のひかりゆゑみられたるにかねて便りゆ聞しにもいやまさりて彼損せりとなりいふかひなくゝ詞ゆもゝれぬ心かりといふ意なり）家をあづけたりつる人

の心も、あれたるなりけり、中垣こそあれ、ひとつ家乃やう

なれば、乃ぞみてあづかれるなり、されども、たよりごとに、物

もたゆぞゆさせたり、こよひひろゝる事と、こわだかにもの

いはせぞ、いとつらくみゆれど、心ざしはせんとぞ（人の心もあれなるをいひ心のかくりて密なりし情の疎くなりたるよりて家のあれしにかけていへるなり此家を預りたるは隣の家人なるべきよたゝ垣を一重へだてたる計なればのぞみて預りしといへりされば便あるごとゆ修覆せん料も折々おくりしをかくあらしてたるみてけしからぬことに思ひしを彼隣に乞ごえんことを憚りて聲だか

にものもいはせぞ去のいふ人々をゆめてさすがに久しく家を預けしものなればいとつらくれど返報せんぞなるとなり）

てくぼまり、水つけるところあり、やとりに松もありき、五

とせ六とせのうちに、千とせやぞきにけん、かたはいなく

なりにけり、いまおひたるぞまどれる（この池といふはどのとものなるくいさいか水のたまりたる所なりかたちゆ松もありしが五六年の間ゆ千年もへたるやうゆありて片つられ枝ゝ伐とりかりさるに今年さらぞまどれるゝ小松としもことさらにいへるゝ下にうせにし子の事といとんとてなり）おほかたたみなあれにたれば、あはれと

ぞ人々いふ、思ひいでぬことなく、こひしきぐうちに、この

家よりてうまれしをんなこの、もろともにろへゝねば、いと

ゞはかなしき（大ゝさあれとて思乃外そこなたれたるをみてむかし戀しく思ひ出ぬゆとおき中ゆやがて出京以前此家にて生れつる女子の其ふもろげ忘れがたきに此度ほれもろへらぬがいか計ゝおしきことゞとなれば）舟人もみな子いだきての

ゝ去る、かゝるうちにあはかなしみにたえぞして、ひそか

に心ざれる人と、いへりけるうた（船人＝船より乃りてきたりし人を　れふべしさて歸京と人〻の悅び）

（さるく中にてなき人を思ひかなしまん事を憚りてひそかよ心ざれる人〻かゝれたりてゐ紀氏の妻なるべし）

うまれしもかへらぬものをわびやとよこまつのあるを

みるがかなしさ、とぞいへる（こゝにて生れし子だよのへらぬ城吾宿にもどなかりし小松の生たる城みるが悲しきとなり）

なはあかぜやあらん、又かくなん（艶足ラスヤアリケン）

みしひとのまつのちとせにましかばとはくかなしき

わかれせまゞやみし人ぞ女子（遠い所ゝ失ひて二たびみえぬ悲しき別れとすべりんやすまゞきものとなり）わをれがさく、くちをしきこと、おはかれども

つくさぜ、とまれかくまれ、ぜくやりてむ（なはむかしのことやうすれがたく戀しきことゝも多けれどもさのみいへつくさぜとかくもかうやうのいたづらなることゝい他乃人にみられんもいうゝなればとくやりすてんとなん破りあり紀氏のみづからたりがはならぬ心のほどぞゆうしき）

（按ふるさきゝ失いれし女子のこと彼國發船の時より書とじめてつひゝ今夜にいたり其歎き淺もて書とぢめられたるゝもひとへに此日記そとむねとせられしことゝ志るしされバ其悲しきあまりゝ心の外ゝ戯れあざれしもさゞそれゝうこたれしものゝら此日記殊ゝ嬉しくいと面白きゆゝしゝあたりて此悲しみある事を思ひやりてみるべきなり）

一ノオモテするなりの次脫漏

それの年の十二月の廿日あまり一日の日のいぬの時にかどでをそのよしいさをかものゝまかきつくめてかけるなり（承平四年ゐるをゐぼ）